



Agilent OpenLab CDS Workstation Plus
(Secure Storage 付き)

インストールおよびコンフィグレーション

注意

文書情報

文書番号: D0141674ja Rev. A.00
エディション: 2026 年 5 月

著作権

© Agilent Technologies, Inc.
2015-2026

本マニュアルの内容は米国著作権法および国際著作権法によって保護されており、Agilent Technologies, Inc. の書面による事前の許可なく、本書の一部または全部を複製することはいかなる形態や方法（電子媒体への保存やデータの抽出または他国語への翻訳など）によっても禁止されています。

Agilent Technologies, Inc.
5301 Stevens Creek Blvd.
Santa Clara, CA 95051,
USA

ソフトウェアリビジョン

このガイドは改訂版が発行されるまで、OpenLab CDS のリビジョン 3.0 に対応しています。

このマニュアルのすべてのファイルパスは、区切り文字としてバックスラッシュ (\) で表示されます。これは円記号と同等で、日本語の Windows オペレーティングシステムと完全に互換性があります。

保証

このマニュアルの内容は「現状有姿」提供されるものであり、将来の改訂版で予告なく変更されることがあります。Agilent は、法律上許容される最大限の範囲で、このマニュアルおよびこのマニュアルに含まれるいかなる情報に関しても、明示黙示を問わず、商品性の保証や特定目的適合性の保証を含むいかなる保証も行いません。Agilent は、このマニュアルまたはこのマニュアルに記載されている情報の提供、使用または実行に関連して生じた過誤、付随的損害あるいは間接的損害に対する責任を一切負いません。Agilent とお客様の間に書面による別の契約があり、このマニュアルの内容に対する保証条項がここに記載されている条件と矛盾する場合は、別に合意された契約の保証条項が適用されます。

技術ライセンス

本書で扱っているハードウェアおよびソフトウェアは、ライセンスに基づき提供されており、それらのライセンス条項に従う場合のみ使用または複製することができます。

権利の制限

米国政府の制限付き権利について: 連邦政府に付与されるソフトウェアおよび技術データに係る権利は、エンドユーザーのお客様に通例提供されている権利に限定されています。Agilent は、ソフトウェアおよび技術データに係る通例の本商用ライセンスを、FAR 12.211 (Technical Data) および 12.212 (Computer Software) 、並びに、国防総省に対しては、DFARS 252.227-7015 (Technical Data -Commercial Items) および DFARS 227.7202-3 (Rights in Commercial Computer Software or Computer Software Documentation) の規定に従い提供します。

安全にご使用いただくために

注意

注意は、取り扱い上、危険があることを示します。正しく実行しなかったり、指示を遵守しないと、製品の破損や重要なデータの損失に至るおそれのある操作手順や行為に対する注意を促すマークです。指示された条件を十分に理解し、条件が満たされるまで、**注意**を無視して先に進んではなりません。

警告

警告は、取り扱い上、危険があることを示します。正しく実行しなかったり、指示を遵守しないと、人身への傷害または死亡に至るおそれのある操作手順や行為に対する注意を促すマークです。指示された条件を十分に理解し、条件が満たされるまで、**警告**を無視して先に進んではなりません。

目次

本書の内容 6

1 PC の準備 7

Windows のインストールおよび更新 8
.NET 3.5 および 4.x Framework のインストール 10
ソフトウェアの入手 12
System Preparation Tool の実行 14
プリンター要件 16

2 OpenLab CDS Workstation Plus のインストール 17

インストールワークフローの概要 18
OpenLab CDS のインストールを開始する前に 20
OpenLab インストーラの実行 22
サイレントインストール 27
ドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード 31

3 インストール後のタスク 34

ソフトウェアインストール後のソフトウェアベリフィケーション 35
ウィルス対策プログラムの設定 36
集中管理された出力先の準備 39
自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備 41

4 オプションの手順 45

オフラインマシンのパフォーマンス向上 46
NIST ライブラリ検索の設定 47
セキュリティ保護されたファイルシステムパスの変更 48

5 ライセンス 49

ライセンスタイプ 50
電子ライセンスの認証 51
SubscribeNet ライセンス 57

6	OpenLab CDS Workstation Plus のコンフィグレーション	63
	OpenLab Control Panel	64
	認証の設定	65
	セキュリティポリシーの設定	67
	ユーザーおよびロールの設定	68
	初期プロジェクトの設定	73
	初期機器のコンフィグレーション	74
	コントロールパネルのその他の設定	75
7	OpenLab CDS ソフトウェアについて	76
	ソフトウェアアーキテクチャ	77
	21 CFR Part 11 のコンプライアンス	81
	カスタマイズ	83
8	システム設定およびメンテナンス	85
	コントロールパネル	86
	Shared Services メンテナンス	87
	バックアップとリストアに関する重要な情報	88
	バックアップ手順	92
	リストア手順	104
	ルーチンメンテナンス	110
	トラブルシューティング	111
9	OpenLab CDS バージョン 3.0 へのアップグレード	113
	ライセンスアップグレード	114
	Workstation Plus ソフトウェアのアップグレード	115
	アップグレード後のタスク	121
	新規または更新された項目	122
10	OpenLab CDS のアンインストール	124
	OpenLab CDS のアンインストール	124
	トラブルシューティングのヒント	125

11 付録 126

コントロールパネルの権限 127

営業およびサポートのお問い合わせ先 137

本書の内容

このドキュメントには、OpenLab CDS Workstation Plus（Secure Storage 付き）のインストール手順、コンフィグレーション、管理、およびメンテナンスの方法が記載されています。ライセンス管理とオペレーティングシステムの設定に関する情報も記載しています。

表 1: 本書で使用される用語と略語

用語	説明
FP	Feature Pack。既存のソフトウェアバージョンへの更新を含み、次の新機能を提供します。 • 既存の機能に影響を及ぼさない、または • 選択オプションへの小さな変更を含む、ただし既存メソッドとデータの下位互換性を維持する。
Secure Storage	データベースを含む分析データを管理するための OpenLab サーバーのコンポーネント。クライアント/サーバーシステムでは常に使用しますが、ワークステーションではオプションです。
AIC	Agilent の分析機器コントローラ
コントロールパネル	Agilent OpenLab ソフトウェア用コントロールパネル
Microsoft コントロールパネル	Microsoft Windows オペレーティングシステムの一部
Shared Services	OpenLab CDS のセキュリティポリシーやコンフィグレーションの一元管理などを制御する一連の管理サービス。Shared Services にはコントロールパネルからアクセスします。

1

PC の準備

Windows のインストールおよび更新 8

.NET 3.5 および 4.x Framework のインストール 10

ソフトウェアの入手 12

Agilent オンラインアカウントの設定 12

ソフトウェアパッケージのダウンロード 13

System Preparation Tool の実行 14

プリンター要件 16

Windows のインストールおよび更新

- 1 ウェブから『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v3.0_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』の最新版にアクセスするか、インストールパッケージの **Setup\Docs** フォルダーから開きます。設定がネットワーク要件に従っていることを確認し、使用するハードウェアとソフトウェアがこのシステムでサポートされるかどうかを判断します。
- 2 コンピューター名は、DNSサーバーが正しく解決できるようインターネット標準 (RFC 952) に従い、以下の文字のみで構成してください。
 - 文字 (a-z、A-Z)
 - 数値 (0-9)
 - ハイフン (-)

注記

下線（アンダースコア）は使用しないでください。コンピューター名に下線が含まれていると、インストールはできません。
コンピューター名の長さは、15 文字以内に制限してください。

コンピューター名はライセンスに反映されます。OpenLab CDS のインストール後はコンピューター名を変更しないことを推奨します。

注記

インストール後にホスト名を変更することはお勧めしません。作業が煩雑で特別な操作が必要となります。ホスト名の変更が必要な場合は、Agilent のサポート担当にお問い合わせください。

- 3 Microsoft インストールメディアまたは IT 部門により提供された適格な PC イメージメディアから Windows オペレーティングシステムをインストールします。設定時に、コンピューター名、管理者のパスワード、およびネットワークの設定を指定します。

システムを既存のドメインに参加させるか、ワークグループモードに設定するか選択します。ドメインの命名は RFC 1034 に準拠する必要があります。

- 4 Windows の推奨バージョンに更新します。

注記

OpenLab CDS ページの [Windows のアップグレード FAQ](#) セクションを参照してください (<https://www.agilent.com/> から「Windows upgrade」を検索)。

PC の準備

Windows のインストールおよび更新

- 5 Windows 品質更新プログラムを確認し、重要なセキュリティパッチをすべて適用します。OpenLab CDS のインストールを続行する前に、Windows 品質更新プログラムが完了していることを確認してください。
- 6 Windows の設定で、**時計と地域** > **日付と時刻**を開きます。地域のタイムゾーンを選択します。

.NET 3.5 および 4.x Framework のインストール

システムに .NET 3.5 および .NET 4.x がインストールされていない場合、System Preparation Tool またはインストールウィザードによって自動的にインストールされます。システムの再起動が必要な場合があります。インストール中のシステム再起動を避けるには、事前に .NET をインストールしてください。

注記

この作業には、インターネット接続が必要です。期待どおりに機能しない場合や、コンピューターがインターネットにアクセスできない場合は、.NET 3.5 を手動でインストールしてください。Microsoft では複数のインストールオプションを提供しています。詳細については、以下を参照してください。

<https://learn.microsoft.com/ja-jp/windows-hardware/manufacture/desktop/deploy-net-framework-35-by-using-deployment-image-servicing-and-management-dism?view=windows-11>

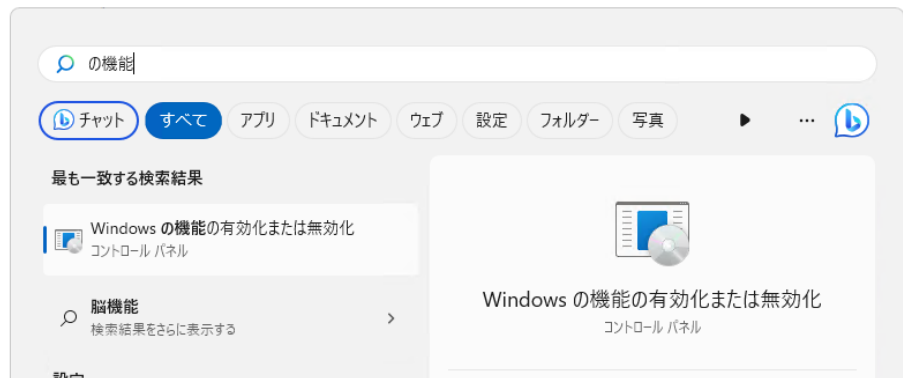
または

Windows11 の場合：<https://learn.microsoft.com/ja-jp/dotnet/framework/install/dotnet-35-windows-11>

Windows 10 の場合：<https://learn.microsoft.com/ja-jp/dotnet/framework/install/dotnet-35-windows>

- 1 Windows のスタートメニューで、Windows の機能の有効化または無効化を検索します。

Microsoft コントロールパネルで検索結果を開きます。



PC の準備

.NET 3.5 および 4.x Framework のインストール

2 以下のように .NET 3.5 を有効にします。

- a .NET Framework 3.5 (.NET 2.0 および 3.0 を含む) ノードを展開します。
- b Windows Communication Foundation 非 HTTP アクティブ化チェックボックスを選択します。

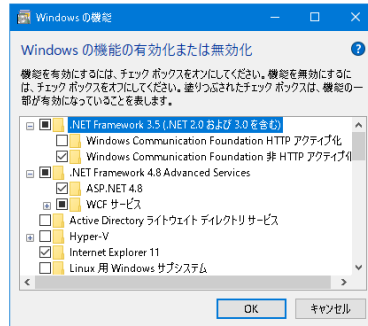


図 1: .NET 3.5 を有効にする (Win 11)

3 NET Framework 4.8 Advanced Services をチェックボックスを選択します。サブアイテムに対しては、既定値を使用します。

注記

Transport Layer Security (TLS) プロトコルの確認

TLS 1.2 (以降) ではさまざまな暗号スイートをサポートしており、それらのうちの一部は攻撃に対して脆弱な可能性があります。OpenLab CDS ではすべての TLS 1.2 (以降) の暗号スイートをサポートしており、お客様の IT ポリシーによって脆弱な暗号スイートが無効化されても影響はありません。古い Transport Layer Security (TLS) セキュリティプロトコル TLS 1.0、TLS 1.1、および SSL 3.0 は OpenLab CDS では不要となり、セキュリティ上のリスクがあります。Microsoft の説明およびお客様の IT ポリシーに従ってこれらが無効にしてください。

一部の OpenLab CDS コンポーネントでは Microsoft .NET 3.5 が必要です。デフォルトでは、このバージョンのフレームワークでは TLS 1.2 以降の使用を必須としていません。ほとんどの IT 環境では、TLS 1.2 は .NET 4.5 以前のフレームワークで有効となっています。これらの変更を支援するスクリプトが、インストールパッケージ内にある `\Setup\Tools\Support\TLS\FixTLSVersions.ps1` です。スクリプト実行については、システム管理者にお問い合わせください。

ソフトウェアの入手

購入後、Agilent からエンタイトルメント情報の電子メールが届きます。この電子メールには、ソフトウェア、ライセンス、および License & Delivery ポータルへアクセスするリンク情報が含まれています。

ソフトウェアを入手するには、エンタイトルメント情報の電子メールから License & Delivery ポータルをクリックします。

Agilent オンラインアカウントの設定

ソフトウェアパッケージをダウンロードし、電子ライセンスを管理するには、Agilent オンラインアカウントが必要です。

エンタイトルメント情報の電子メールから **License & Delivery** ポータルにアクセスすると、Agilent 内部システムによりお客様の顧客ステータスが判断されます。Agilent オンラインアカウントをまだお持ちでない場合には、ご自身で登録するよう促されます。Agilent オンラインアカウントをお持ちの場合には、**Sign In** ページが開きます。

Agilent オンラインアカウントを作成するには：

- 1 **Registration** フォームに記入し、**Submit** をクリックします。
アクティベーション電子メールが、no-reply@mailing.agilent.com から送付されます。
- 2 この電子メールの指示に従って、電子メールアドレスを確認し、パスワードを設定してください。
- 3 お客様の Agilent オンラインアカウントにログインします。

初回ログイン時には、ワンタイム認証コードが必要です。このコードは電子メールで送付されます。

注記

電子メールが届かない場合は、スパムフォルダーや迷惑メールフォルダーを確認してください。電子メールが見つからない場合には、Agilent グローバルサービス コンタクトセンターまでご連絡ください (<https://explore.agilent.com/ContactUs-jp>)。

- 4 この認証コードを入力すると、Agilent.com への認証が完了します。

ソフトウェアパッケージのダウンロード

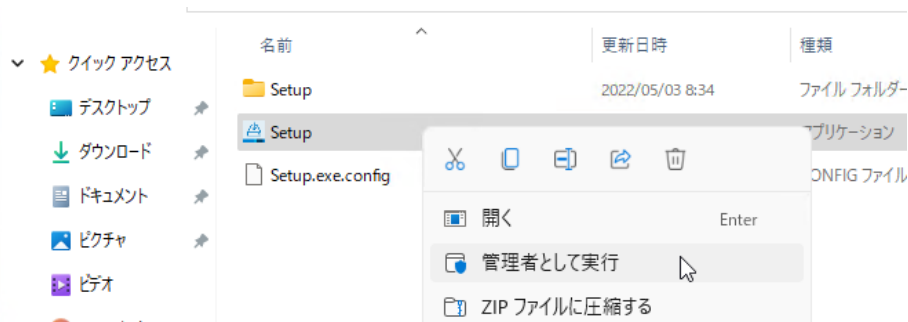
Agilent からエンタイトルメント情報の電子メールを受信し、Agilent オンラインアカウントを保有している必要があります。

- 1 エンタイトルメント情報の電子メールを開き、**License & Delivery** ポータルをクリックします。
Agilent オンラインアカウントのサインインページが読み込まれます。
- 2 **Sign In** 画面に、資格情報を入力し、**Sign In** をクリックします。
- 3 対象のエンタイトルメントに絞り込みます。
- 4 エンタイトルメントで **Download/Activate software** をクリックします。
Flexnet Operations ポータルが開きます。
- 5 ダウンロードするソフトウェアをクリックします。
- 6 **I Agree** をクリックして、**Software Terms and Conditions** に同意します。
- 7 表示されるリンクをクリックして、ファイルをダウンロードします。
- 8 ダウンロードが完了したら、ローカルフォルダーにソフトウェアパッケージを解凍します。

System Preparation Tool の実行

System Preparation Tool (SPT) を実行すると、Windows の設定を確認してマシンに適用します。OpenLab インストーラを実行すると、これらの設定を自動的に適用します。事前に SPT を実行するとインストールプロセスが短縮され、PC の再起動が回避されます。必須設定と推奨設定の概要は、『[OpenLab CDS の要件とサポートする機器 \(CDS_v3.0_Requirements.ja.pdf, D0028027ja\)](#)』の System Preparation Tool の章を参照してください。

- 1 インストーラを開くには、**setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。



注記

Windows のユーザーアカウント制御 (UAC) をオンにしている場合は、作業の続行を明示的に確認しなければなりません。

- 2 プランタブから、System Preparation Tool を選択します。



System Preparation Tool ウィンドウが開きます。

- 3 ドロップダウンリストから製品コンフィグレーション
OpenLab CDS~WorkstationPlus~Win10 または
OpenLab CDS~WorkstationPlus~Win 11
を選択し、**続行**をクリックします。

インストーラが必須の Windows 設定をすべて自動的に適用して確実にインストールを実行します。

- 4 システムに適用する推奨設定を選択します。

推奨設定によってシステムのパフォーマンスと安定性を向上できますが、アプリケーションを展開するために完了させる必要はありません。必須設定の後に推奨設定が表示されます。

推奨設定のチェックボックスをオフにすることができます。必須設定はオフにできません。推奨アクションがデフォルトで選択されており、オフにしないとこれらのアクションが適用されます。

- 5 修正の適用をクリックして正しい設定を適用します。

System Preparation Tool により選択した設定が更新され、新しいステータスが**コンフィグレーションの更新**ページに表示されます。すべてのアクションがログファイルに保存されます。ログファイルへのリンクがページの下部にあります。

- 6 次へをクリックして**SYSTEM PREPARATION レポート**ページへ進みます。

SYSTEM PREPARATION レポートが表示されます。選択したすべての設定の新しいステータスが一覧表示されます。

SYSTEM PREPARATION レポートがディスクに保存されます。ページの上部に保存場所が表示されます。

- 7 **レポートの印刷**をクリックして SYSTEM PREPARATION レポートを印刷します。

Adobe PDF プリンターを使用してファイルなどに出力したり、コメントを追加したりできます。

- 8 SYSTEM PREPARATION レポートには、System Preparation Tool によって自動的に更新されない必須設定や推奨設定が表示されます。SYSTEM PREPARATION レポートの**必要な操作**セクションで指定された指示に従って、オペレーティングシステムの設定を手動で更新します。

- 9 **完了**をクリックします。

- 10 要求された場合はシステムを再起動します。

プリンター要件

通常使うプリンターとして OpenLab CDS は、Adobe PDF、Microsoft Print to PDF、または Microsoft XPS Document Writer をサポートしていません。

注記

PDF プリンターを通常使うプリンターとして設定すると、レポートの印刷が失敗する原因となることがあります。

- ー 正常に印刷するために、**Windows** で通常使うプリンターを管理するを選択してください。

2

OpenLab CDS Workstation Plus のインストール

インストールワークフローの概要 18

OpenLab CDS のインストールを開始する前に 20

OpenLab インストーラの実行 22

サイレントインストール 27

インストールパラメータのエクスポート 27

インストールの実行 28

リターンコード 29

ログおよびトレース 30

ドライバソフトウェアのインストールまたはアップグレード 31

アドオンドライバソフトウェアのインストールまたはアップグレード 32

OpenLab CDS にドライバソフトウェアを登録 32

インストールワークフローの概要

準備

- 詳細は『OpenLab CDS 要件ガイド』を参照
- System Preparation Tool を実行



インストール

1. インストールウィザードの実行
(ソフトウェアベリフィケーションを含める)
2. インストール後に：
集中管理された出力先の準備
3. オプション：
オフラインマシンのパフォーマンス向上



ライセンスの取得

1. ライセンスを取得
2. ライセンスをインストール

- インストール時の再起動を回避するため、インストールを開始する前に System Preparation Tool を実行してください。 [System Preparation Tool の実行](#) 14ページ を参照してください。
- スクリプトを使用してインストールする場合は、[サイレントインストール](#) 27ページ を参照してください。
- [OpenLab CDS Workstation Plus のインストール](#) 17ページ を参照してください。
- [インストール後のタスク](#) 34ページ を参照してください。
- [オプションの手順](#) 45ページ を参照してください。

[ライセンス](#) 49ページ を参照してください。



コンフィグレーション

- 認証の設定
- プロジェクトの設定
(監査証跡設定を含む)
- 機器の設定

OpenLab CDS Workstation Plus
のコンフィグレーション 63ページ
を参照してください。

コンフィグレーションタスクは
コントロールパネルで実行しま
す。

詳細については、[OpenLab Help
& Learning](#) の「コントロールパネ
ル」セクションを参照してくだ
さい。

OpenLab CDS のインストールを開始する前に

OpenLab CDS の以前のバージョンからアップグレードする場合は、**OpenLab CDS バージョン 3.0 へのアップグレード** 113ページ を参照してください。

- 1 ケーブル、検出器、通信ケーブルなど、必要なハードウェアをすべて接続します。Agilent 以外の機器では、GPIB インターフェイスが必要な場合があります。
- 2 .NET 4.x の場合に「名前付きパイプのアクティブ化」が選択されていることを確認します。
 - a Windows のスタートメニューで、Windows の機能の有効化または無効化を検索します。
 - b Microsoft コントロールパネルで検索結果を開きます。
 - c .NET Framework 4.8 Advanced Services を展開します。
 - d WCF サービスを展開します。
 - e 名前付きパイプのアクティブ化を選択します。

- 3 『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v3.0_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』の「ファイアウォールの設定」に記載されたファイアウォールポートを必ず開いてください。

Windows コマンド **netstat -aon** を使用して、コンピューターがリスニング状態のすべてのアクティブポートと、シャットダウンに必要な各プロセス ID (PID) を表示します。

TCP ポート 80 および 443 が利用できることを確認してください。

注記

これらのポートが他のプログラムで使用されている場合：

World Wide Web Publishing サービスのスタートアップの種類を**手動**または**無効**に設定するか、**インターネットインフォメーションサービス** (Internet Information Services = IIS) を**無効**にします。

コマンド **net stop http** は、HTTP サービスに依存し、かつ停止されるすべてのサービスが一覧表示されます。これらのいずれかを無効にすることが必要な場合があります。

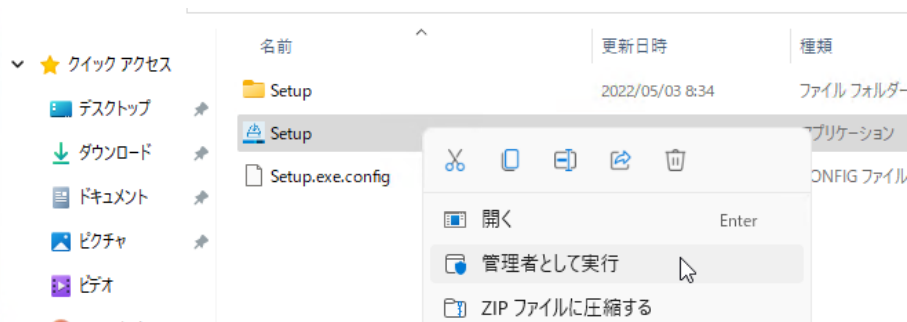
- 4 システムをウイルスから保護します。
 - a ウィルス対策プログラムをインストールします。
 - b インストールを行う間は、ウイルス対策ソフトウェアを無効にしてください。
- 5 すべてのコンポーネントを正常にインストールおよびアクティベーションできるようにするため、LAN ケーブルが接続され、ネットワークが利用できることを確認してください。
- 6 インストールを実行する管理者権限を持ったローカル管理者アカウントを準備します。PC がドメインの場合、ローカルの管理者グループに所属しているドメインユーザーを準備します。

デフォルトでは、Windows の **プログラムのデバック** 権限がすべてのユーザーに付与されています。この権限を削除しないでください。
OpenLab CDS ソフトウェアのインストールに必要です。

OpenLab インストーラの実行

このセクションでは、ソフトウェアの新規インストールについて説明します。既存の OpenLab CDS インストールのアップグレードの情報については、[OpenLab CDS バージョン 3.0 へのアップグレード 113ページ](#) を参照してください。

- 1 インストーラを開くには、**setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。



- 2 インストールタブで、OpenLab CDS Workstation Plus をクリックします。



- 3 使用許諾契約書：Agilent の使用許諾条件を読んで確認します。次へをクリックします。
- 4 インストールフォルダー：OpenLab CDS のインストールフォルダーを指定します。ドライブのルートフォルダーは使用しないでください。次へをクリックします。
- 5 Secure Storage :

Shared Services 'Admin' ユーザーパスワード：コントロールパネルに管理者（admin ユーザー）としてログインするためのパスワードです。

PostgreSQL データベースのユーザーパスワード：PostgreSQL データベースに管理者（postgres ユーザー）として直接ログインするためのパスワードです。

注記

パスワードは必ず安全な場所に記録しておいてください。

次へをクリックして続行します。

- 6 コンポーネント資格情報：ソフトウェアコンポーネントで使用するパスワードを入力します。既存のパスワードが要件を満たしていない場合、新しいパスワードの入力を求められる場合があります。

パスワードは以下の一般的なガイドラインに従う必要があります。

- 最小 8 文字
- 大文字 1 文字以上
- 小文字 1 文字以上
- 数値 1 つ以上
- 使用可能な文字のみを含める

使用可能な全文字：

- 大文字 A-Z
- 小文字 a-z
- 数値 0-9
- 特殊文字：!@#\$%^&+_=

注記

パスワードは必ず安全な場所に記録しておいてください。

次へをクリックして続行します。

- 7 ストレージロケーション：

ストレージロケーション名：アプリケーションファイルが保存されるコンテンツ管理ロケーションの名前またはラベルを指定します。特殊文字や記号は使用しないでください。

ストレージロケーションパス：デフォルトのファイルストレージロケーションの絶対パスまたはUNC形式を指定します。

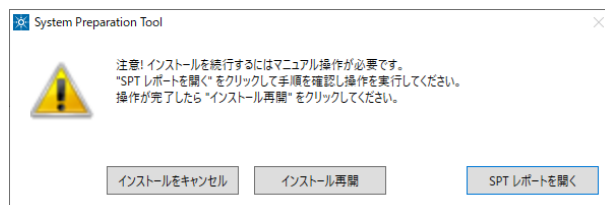
次へをクリックして続行します。

- 8 システム準備：システムの推奨設定のリストがインストーラに表示されます。システムに適用する必要のない項目のチェックボックスをオフにすることができます。必須設定はインストール時に自動的に適用されます。必須設定と推奨設定の概要は、『[OpenLab CDS の要件とサポートする機器 \(CDS_v3.0_Requirements_ja.pdf, D0028027ja\)](#)』の System Preparation Tool の章を参照してください。

次へをクリックしてレビューページへ進みます。設定はインストールの一環として適用されます。

- 9 レビュー：インストールされるすべてのコンポーネントと、適用されるすべての設定がここに表示されます。
- 今後サイレントインストールを行えるようにプロパティファイルを保存するには（[サイレントインストール](#) 27ページ を参照）、[コンフィグファイルに保存](#)をクリックします。
 - [インストール](#)をクリックしてインストールを開始します。

- 10 オペレーティングシステムでユーザーアクションが必要な場合、以下の警告が表示されます。



続行するオプション

- 推奨設定：SPT レポートを開くをクリックし、必要な操作セクションで更新が必要かどうかを確認します。操作が完了したら、インストール再開をクリックします。
- インストールをキャンセル：インストールが中断されます。必要な更新を行ってインストールを再開します。
- インストール再開：設定が適用されていない場合でも、ダイアログが閉じ CDS コンポーネントのインストールが続行されます。必要に応じて、インストールが完了した後に設定を更新できます。

11 インストール：インストールが完了したら、次へをクリックします。

12 コンフィグレーション：コンフィグレーションツールはバックグラウンドで動作し、コンテンツ管理コンポーネントを設定します。これには約 10 min かかります。完了したら、次へをクリックします。

登録の問題が発生した場合は、ファイアウォールポートがブロックされている可能性があります。たとえば、ポート 80 と 443 が解放されているかどうかを確認してください。World Wide Web 発行サービスによってブロックされている場合は、このサービスを停止してください。

注記

World Wide Web 発行サービスによってポート 80 と 443 がブロックされていない場合：

Windows コマンド `netstat -aon` により、コンピューターがリッスン状態のすべてのアクティブなポートと、シャットダウンに必要な各プロセス ID (PID) が表示されます。コマンド `net stop http` は、HTTP サービスに依存し、かつ停止されるすべてのサービスが一覧表示されます。これらのいずれかを無効にすることが必要な場合があります。

13 完了：

- 適用された Windows 設定のレポートを表示するには、**システム準備**の下のリンクをクリックします。設定を手動で適用する必要がある場合、警告が表示されます。リンクされたレポートに詳細が表示されます。
- すべてが正しくインストールされたことを確認するには、**ソフトウェアベリフィケーションの起動**をクリックします¹。
- インストールを完了するには、**コンピュータを再起動**チェックボックスをオンにし、**完了**をクリックします。

14 インストール中にエラーが発生した場合：

%ProgramData%\Agilent\InstallLogs\<<date and time> にあるインストールログファイルを確認します。ProgramData は非表示のフォルダーです。

インストールには、標準の機器ドライバーセットが含まれます。他の機器ドライバーソフトウェアが必要な場合は、別途インストールしてください。**アドオンドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード** 32ページ を参照してください。

¹ 後でこのツールを個別に起動するには、スタートメニュー > (すべてのアプリ >) Agilent Technologies > Software Verification Tool を選択します。

サイレントインストール

OpenLab CDS では、インストールのコマンドラインモード（サイレントインストール参照）をサポートしています。このモードは、インストール、アップグレード、アンインストールをサポートしています。サイレントインストールは手動、または LANDesk や HP CM などのソフトウェア管理システムの一部として実行できます。

インストールパラメータのエクスポート

OpenLab インストーラでは、インストールパラメータを XML ファイルへエクスポートし、サイレントインストールで使えるようにする機能をサポートしています。

- 1 OpenLab インストーラを起動します。
- 2 ウィザードの指示に従います。
- 3 レビュー画面に達したら、**コンフィグファイルに保存**をクリックします。
ファイルを適切なロケーションに保存します。ファイルは自動的に .XML ファイルとして保存されます。
サイレントインストールに、XML ファイルを使用できるようになりました。

インストールの実行

前提条件

- ・ サイレントインストール用の XML ファイルが作成されています。 [インストールパラメータのエクスポート](#) 27ページ を参照してください。
- ・ .Net Framework がシステムにある。システムにない場合は、自動的にインストールします。次に、マニュアルで 承認 を選択して、使用許諾契約書に同意する必要があります。

- 1 インストールパッケージ²のコンテンツを一元管理されたフォルダーにコピーします。
- 2 XML ファイルを適切なフォルダーにコピーします。
- 3 コマンドプロンプトまたは Power shell プロンプトの実行可能ファイルを右クリックし、管理者として実行します。

- 4 インストールファイルを保存したロケーションに移動します。

例：C:\CDS

- 5 インストールを開始するには、次の構文で CDSInstaller.exe を呼び出します。

```
CDSInstaller.exe -s -norestart OpenLabProduct="CDSWorkstationSecStg"  
-LicenseAccepted=True -Configfile="<drive>\<path>\<filename>.xml"
```

<Path and Filename> は、作成されたファイルのパスおよびファイル名です。

例：

```
CDSInstaller.exe -s -norestart OpenLabProduct="CDSWorkstationSecStg"  
-LicenseAccepted=True -Configfile="C:  
\ConfigFiles\ConfigurationSecStgWS.xml"
```

このコマンドでは、ユーザーインターフェイスなしで OpenLab インストーラを起動します。

- 6 インストールの終了に約 5 分かかります。インストールのプロセスをチェックするには、
%ProgramData%\Agilent\InstallLogs にあるログファイルを確認してください。

2 ソフトウェアは、Agilent オンラインアカウントからダウンロードできます。オプションとして USB メディアを利用できます。

必要なインストールファイルが不足している場合、OpenLab インストーラはログファイルにエントリを作成します。コンポーネントのタイプに応じて、インストールを続行またはロールバックします。このような状況では、エラーコードが返されます。

7 インストールが終了したら、PC を再起動します。

リターンコード

コマンドラインモードでインストール、アンインストール、またはアップグレードを行うと、システムから以下の数値コードが返されます。

表 2: リターンコード：失敗

コード	戻り値	理由
ERROR_PROCESS_ABORTED	1067	プロセスが予期せず終了しました。
ERROR_INSTALL_USEREXIT	1602	ユーザーがインストールをキャンセルしました。
ERROR_INSTALL_FAILURE	1603	インストール中に致命的なエラーが発生しました。
ERROR_INSTALL_SUSPEND	1604	インストールが一時停止し、未完了の状態です。
ERROR_INSTALL_ALREADY_RUNNING	1618	別のインストールがすでに実行中です。このインストールを続行する前に、実行中のインストールを完了してください。
ERROR_INSTALL_PACKAGE_INVALID	1620	このインストールパッケージを開けませんでした。アプリケーションベンダーに連絡して、有効な Windows インストーラーパッケージであることを確認してください。
ERROR_FUNCTION_NOT_CALLED	1626	機能を実行できませんでした。
ERROR_PRODUCT_VERSION	1638	この製品の別のバージョンがインストール済みです。このバージョンのインストールを続行できません。この製品の既存のバージョンを設定または削除するには、Windows 設定のインストールされているアプリにある変更またはアンインストールを実行してください。

OpenLab CDS Workstation Plus のインストール サイレントインストール

コード	戻り値	理由
ERROR_ACCESS_DENIED	5(0x5)	アクセスが拒否されました。
ERROR_NOT_SUPPORTED	50(0x32)	リクエストはサポートされていません。

表 3: リターンコード：再起動が必要

コード	戻り値	理由
ERROR_SUCCESS_REBOOT_INITIATED	1641	インストーラが再起動しました。このメッセージは成功を示します。
ERROR_SUCCESS_REBOOT_REQUIRED	3010	インストールを完了するには再起動する必要があります。このメッセージは成功を示します。ForceReboot アクションが実行されたインストールは含まれません。
ERROR_FAIL_NOACTION_REBOOT	350(0x15E)	システムの再起動が必要なため、アクションは実行されませんでした。

表 4: リターンコード：成功

コード	戻り値	理由
ERROR_SUCCESS	0	アクションは正常に完了しました。
ERROR_SKIP_CONFIGURATION	77	設定手順をスキップします。ユーザーコマンドにより実行が停止しました。
ERROR_NON_VITAL_PACKAGE_FAILED	4010	インストーラの一部が完了しました。重要でないパッケージが失敗しました。

ログおよびトレース

すべての例外、エラー、情報メッセージが
ドライブ:\ProgramData\Agilent\InstallLogs\<<date and time> にログされます。
ProgramData は非表示のフォルダーです。

ドライバソフトウェアのインストールまたはアップグレード

以下のドライバソフトウェアパッケージは、OpenLab CDS と共に自動的にインストールされます。詳細については、『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v3.0_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』を参照してください。

- Agilent LC および CE
- Agilent LC/MS SQ
- Agilent LC/MS QTOF
- Agilent GC
- Agilent GC/MS SQ
- Agilent SS420x
- Agilent Data Player (Virtual Instruments)

その他の機器ドライバソフトウェアやアドオンソフトウェア、既存のドライバソフトウェアのアップグレードは、マニュアルでインストールおよびコンフィグレーションする必要があります。機器ドライバソフトウェアおよびアドオンソフトウェアパッケージは、インストールパッケージの **Setup¥Packages** または **Setup¥Packages¥Add-Ons** にあります。

Agilent の最新のドライバが SubscribeNet で入手できます。ソフトウェアのライセンス管理およびソフトウェアのダウンロードを行うには、ブラウザに次のリンクを貼り付けて SubscribeNet にログインしてください。<https://agilent.flexnetoperations.com>。製品リストで、**OpenLab Software > OpenLab Agilent Instrument Drivers**を選択します。

アドオンドライバソフトウェアのインストールまたはアップグレード

- 1 ドライバーのインストーラパッケージを実行し、インストールウィザードに従います。

インストールまたはアップグレード手順の詳細については、各ドライバのマニュアルを参照してください。

- 2 OpenLab CDS にドライバソフトウェアを登録します。

[OpenLab CDS にドライバソフトウェアを登録 32ページ](#) を参照してください。

OpenLab コンフィグレーションツールは、新たにインストールまたは更新されたすべての機器ドライバを検出して Shared Services に登録します。新しい機器タイプがコントロールパネルで利用できるようになります。

OpenLab CDS にドライバソフトウェアを登録

以下の手順は、上記以外のドライバのインストール後や、任意のドライバのアップグレード後に実施する必要があります。これらの手順を行うことで、新しいドライバが OpenLab CDS で利用できるようになります。

- 1 Windows で、スタート > (すべてのアプリ >) Agilent Technologies > OpenLab コンフィグレーションを選択します。

- 2 OpenLab コンフィグレーションツールで、localhost をサーバーホスト名として入力します。

The screenshot shows the 'OpenLAB コンフィグレーション' (OpenLAB Configuration) window. It is divided into three main steps on the left and a detailed instruction panel on the right.

- ステップ 1 - サーバー (Step 1 - Server):** Contains a text input field for 'ホスト名' (Host Name) and a '接続' (Connect) button.
- ステップ 2 - 認証 (Step 2 - Authentication):** Contains three input fields: 'ユーザー名' (Username), 'パスワード' (Password), and 'ドメイン' (Domain).
- ステップ 3 - 追加オプション (Step 3 - Additional Options):** Contains a checked checkbox labeled '機器コントローラの登録' (Register device controller).

The right panel provides instructions for each step:

- サーバー (Server):** '接続するOpenLAB サーバーのホスト名を入力し、[接続] ボタンをクリックしてください。' (Enter the host name of the OpenLAB server to connect to and click the [Connect] button.)
- 認証 (Authentication):** '指定したサーバーの資格情報を入力してください。' (Enter the credentials for the specified server.)
- 追加オプション (Additional Options):** '追加オプションを選択し、[登録] ボタンをクリックしてください。' (Select additional options and click the [Register] button.)

At the bottom right, there are 'キャンセル' (Cancel) and '登録' (Register) buttons.

- 3 接続をクリックして、ユーザー資格情報の入力ボックスを有効にします。
- 4 ステップ 2- 認証で、ユーザー認証情報を入力します。
- 5 機器コントローラの登録チェックボックスがオンになっていることを確認します。
- 6 登録をクリックします。
登録結果ダイアログが表示されます。
- 7 PC を再起動します。

3

インストール後のタスク

ソフトウェアインストール後のソフトウェアベリフィケーション 35

ウィルス対策プログラムの設定 36

集中管理された出力先の準備 39

出力先フォルダーのトラブルシューティング 40

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備 41

ドメインユーザーアカウントを設定 41

ネットワークプリンターの自動印刷を有効 44

ソフトウェアインストール後のソフトウェアベリフィケーション

ソフトウェアベリフィケーションツール（SVT）では、使用するシステムが正しく構築およびインストールされ、設計仕様通りになっていることを示す文書が提供されます。インストールの終了時にソフトウェアベリフィケーションが正常に実行されている場合、再度実行する必要はありません。

- 1 Windows オペレーティングシステムを使用して、スタート > (すべてのアプリ >) **Agilent Technologies > Software Verification Tool** を選択します。
- 2 検証するコンポーネントを選択します。
- 3 評価を実行を選択します。
アプリケーションが実行され、ソフトウェアベリフィケーションレポートが作成されます。
ドライブ:\SVReports にレポートが自動的に保存されます。
- 4 レポートに不合格と表示されている場合、コンピューターの要件を確認し、データシステムを再インストールしてください。
ソフトウェアベリフィケーションレポートの結果が「合格」となるまで、システムを使用しないでください。

ウイルス対策プログラムの設定

- 1 「ファイアウォールの設定」に記載されたファイアウォールポートを必ず開いてください。『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v3.0_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』を参照してください。
- 2 以下のフォルダーをウイルス対策スキャンから除外する必要があります。これらのフォルダーをスキャンする場合は、システムが測定中やデータ解析中でないときに実行してください。スキャンによって動作が遅くなったり、ウイルス対策プログラムと CDS アプリケーションが同じファイルへ同時アクセスすることで分析が中断されたりすることがあるためです。
 - ・ セットアップ時に設定したストレージロケーション（新規インストールのデフォルト：C:\SSStorage; アップグレードしたシステムのデフォルト：C:\DsData）
 - ・ ドライブ:\Program Files (x86)\Agilent Technologies
 - ・ ドライブ:\ProgramData\Agilent
 - ・ ドライブ:\ProgramData\Agilent IPB Files
 - ・ ドライブ:\ProgramData\Agilent Technologies, Inc
 - ・ ドライブ:\ProgramData\ChromatographySystem
 - ・ ドライブ:\ProgramData\firebird
 - ・ ドライブ:\ProgramData\IsolatedStorage除外するフォルダーの設定方法は、使用しているウイルス対策ソフトウェアのマニュアルを参照してください。

注記

ネットワーク不正侵入防止機能付きのウイルス対策ソフトウェアの場合、一般的なシステムパフォーマンスが多少低下することを想定してください。ネットワーク不正侵入防止機能を無効にするには、使用しているウイルス対策ソフトウェアの説明を参照してください。

- 3 次のファイルをウイルス対策スキャンから除外する必要があります。
 - ・ ドライブ:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Acquisition\AcquisitionServer.exe

オプション設定の手順

Agilent では、パフォーマンス向上のため、一定のアプリケーションをホワイトリストに登録することをお勧めしています。これらの設定は特に、OpenLab CDS の実行時、ウィルス対策ソフトウェアにより大量の CPU リソースが消費される場合に検討してください。ウィルス対策ソフトウェアには、通常、以下の設定を推奨します。ベンダーが異なると、用語やインターフェイスが異なることがあります。お使いの特定製品のドキュメントを参照してください。

1. Web/URL レピュテーション または Web 保護：ウィルス対策ソフトウェアに Web または URL レピュテーションの機能が含まれている場合、この機能を無効化して、性能を最大化することを検討してください。

これをオフにすると、ブラウジングを通したマシンの Web トラフィックがチェックされないというリスクがあります。

ゲートウェイレベル上に別の URL/Web スキャナを設定してエンドポイントを保護するか、エンドポイントからインターネットへのアクセスを制限してください。大部分の感染はインターネット Web サイトに由来するため、これらのマシンからアクセスすべきではありません。

2. リアルタイムスキャン：除外対象を追加し、スキャンを作成、変更、または取得したファイルから作成または変更したファイル（または最も近い同等ファイル）へ変更します。

除外すると Agilent Technologies の作業ディレクトリはスキャンされないため、パフォーマンスが向上します。

このマシン上で作成または変更されたファイルしかスキャンされないリスクがあります。アクセスしただけのファイルは省略されます。作成時またはマシンへの書き込み時に、気付かずに感染してしまった潜伏ファイルはスキャンされません。

スキャンスケジュールを毎日に増やし、マシン上のすべてのファイルについて感染や潜伏を確認してください。

3. 動作モニタリング/アプリケーションコントロール：ウィルス対策ソフトウェアに動作モニタリングまたはアプリケーションコントロールの機能が含まれている場合、承認済みのリストに、信頼できるフォルダーかアプリケーションを追加することを検討してください。下記リストを初期設定の参考にしてください。

注記

除外したファイルが感染しても検出されません。検出されないリスクを回避する措置を講じてください。たとえば、これらのファイルをカバーするには、毎日スキャンが実行されるようにします。

Program Files (x86)\Agilent Technologies\Certificate Service\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\Data Collection Agent\

Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab\Services\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Services\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Acquisition\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Backup Utility\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Restore Utility\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Data Analysis\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Platform\
Data Repository\Data Repository\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Platform\
Reverse Proxy\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenSearch\
Program Files (x86)\Agilent Technologies\Test Services\

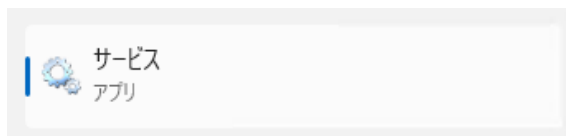
4. リアルタイムモニタリング：以下のフォルダーをリアルタイムモニタリング設定の除外リストに追加します。

ドライブ:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\

集中管理された出力先の準備

OpenLab CDS では、データ解析を開かずに、測定時にデータを自動的に解析することができます。測定時の解析中に、注入レポートの印刷が必要になる場合があります。集中管理された出力先では、これらのレポートが共有出力先フォルダーにコピーされます。次に、FolderMill などのサードパーティ製のプログラムが共有フォルダーにアクセスし、フォルダー内のファイルをプリンターへ送信します。

- 1 Windows のスタートメニューからサービスを検索します。サービスアプリケーションを開きます。



- 2 Agilent OpenLab CopyTo Server を右クリックし、プロパティを選択します。
- 3 ログオンタブをクリックし、アカウントを選択してドメインユーザーのログイン資格情報を入力します。ユーザーがローカル管理者グループのメンバーで、出力先フォルダーへ書き込む権限を持っている必要があります。
- 4 設定を確認して、サービスを再起動します。
- 5 OpenLab のコントロールパネルから管理 > 出力先フォルダーで共有した出力先フォルダーを設定します。
 - a 出力先フォルダーの追加をクリックします。
 - b 名前、フォルダーパス（UNC 形式）、説明（オプション）を入力し、保存をクリックします。
- 6 オプション：キューのサイズを設定します。

出力先フォルダーごとにキューのサイズが異なります。各々のキューのサイズは、コンフィグレーションファイル
ドライブ:\ProgramData\Agilent\CopyToServer\CacheSizeLimit.ini で定義します。パラメータ CacheSizeLimit でキューのサイズを変更することが可能です。

インストール後のタスク

集中管理された出力先の準備

デフォルト値は 500 MB で、各キュー（出力先フォルダー）のサイズはデフォルトでは 500 MB に制限されます。キャッシュの最大サイズに達するまで、ファイルがキューに入ります。最大サイズに達すると、キューはリクエストの受け入れを停止します。キューはクリアされた後、自動的に再起動してリクエストの受け入れを開始します。

出力先フォルダーのトラブルシューティング

問題	解決策
Agilent OpenLab CopyTo Client または Agilent OpenLab CopyTo Server サービスがクラッシュした	サービスは自動的に再起動します。
ワークステーションと出力先フォルダー間のネットワークの問題	出力要求がワークステーション上でバッファされます。ネットワークが回復すると、ファイルは出力先フォルダーへ自動的にコピーされます。
出力先フォルダーのキャッシュがいっぱいになっている	出力先フォルダーのアクセスを確認してください。キャッシュサイズを増やすことを検討してください（ 集中管理された出力先の準備 39ページ を参照）。
権限が不十分のため出力先フォルダーにアクセスできない	Agilent OpenLab CopyTo Server サービスにログインしたドメインユーザーがローカル管理者で、出力先フォルダーに書き込む権限を持っていることを確認してください。
レポートが出力先フォルダーでスタックしている	プリント用の出力先フォルダーへのアクセスに使用されているサードパーティ製のソフトウェアが正しく機能していることを確認してください。プリンターエラーが発生していないことを確認してください。

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備

以下を行う場合は、次の手順を実行してください。

- ・ 自動解析中にレポートを作成し、ファイルとして保存する。ネットワーク共有へのレポートのエクスポートは、レポートを外部システム（LIMS など）へ送信する一般的な方法です。
- ・ 自動解析中に生データや結果をエクスポートし、ネットワーク共有にファイルを保存する。

この方法は、ネットワーク共有にアクセスしてサービスとしてログインするための特定のドメインユーザー権限が必要です。

ドメインユーザーアカウントを設定

- 1 ローカル管理権限を持つ Windows ドメインユーザーとしてログインします。
- 2 Windows のスタートメニューからサービスを検索します。サービスアプリケーションを開きます。

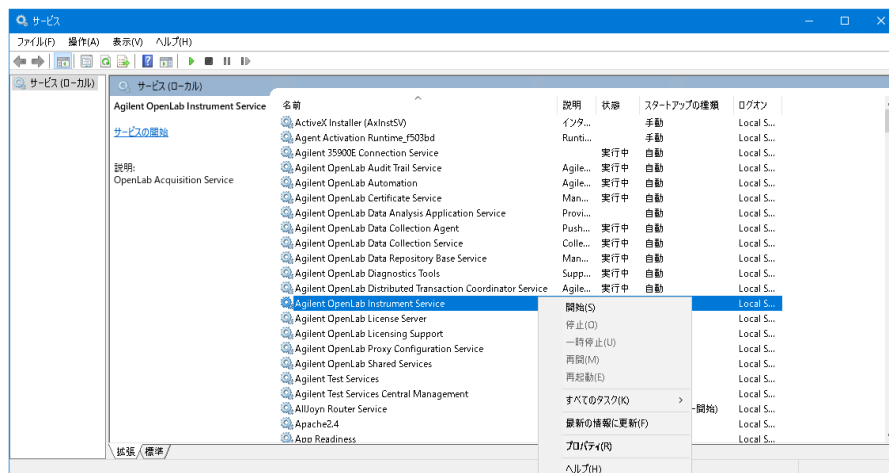


- 3 Agilent OpenLab Instrument Serviceのステータスが**開始**または**実行中**になっていることを確認します。停止している場合は、右クリックし**開始**を選択します。

インストール後のタスク

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備

- 4 Agilent OpenLab Instrument Service を右クリックし、プロパティを選択します。



インストール後のタスク

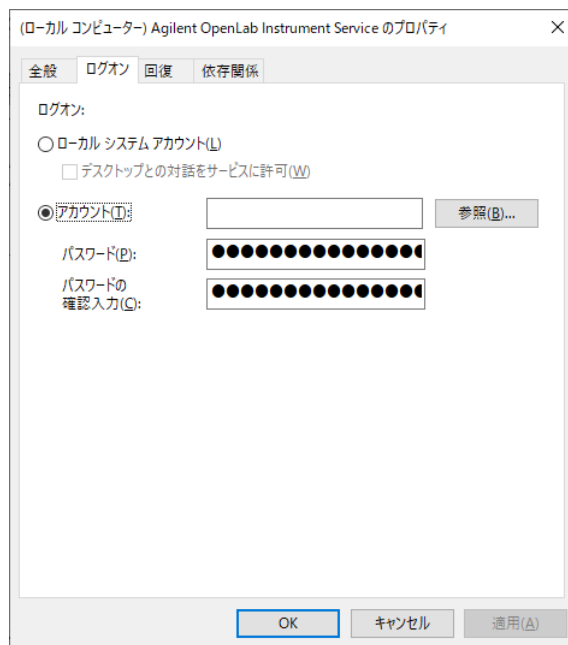
自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備

- 5 ログオンタブでアカウントを選択し、ネットワーク印刷権限を持つドメインユーザーのログイン資格情報を入力します。

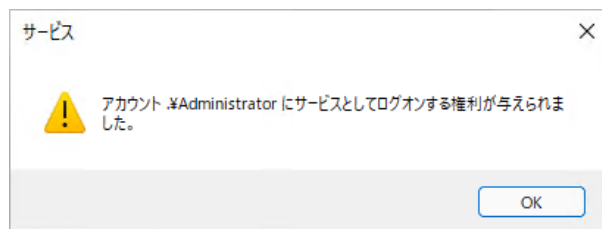
注記

ユーザーがローカル管理者グループのメンバーである必要があります。

OK をクリックします。



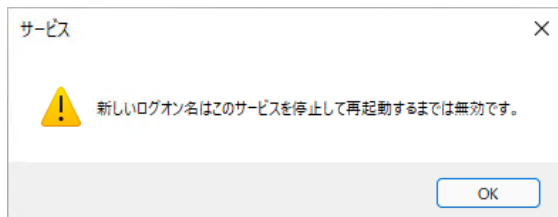
- 6 サービスウィンドウで、アカウントにサービスとしてログオン権限が正しく付与されたことが確認されます。OK をクリックします。



インストール後のタスク

自動解析中のネットワーク共有へのエクスポートを準備

- 7 サービスウィンドウで OK をクリックして、サービスを終了して再起動するまで新しいログオン名は有効にならないことを確認します。



- 8 PC を再起動します。これにより、Instrument Service で指定したログオンユーザーが、データ測定でファイルを自動的にネットワーク共有へエクスポートできるようになります。

ネットワークプリンターの自動印刷を有効

出力先フォルダーを使用せず、自動解析中にネットワークプリンターに印刷する必要がある場合は、この手順に従ってください。

前提条件

- ・ ドメインユーザーアカウントが設定済みである（[ドメインユーザーアカウントを設定](#) 41ページ を参照）。
- 1 Agilent OpenLab Instrument Service のプロパティウィンドウのログオンタブで指定したドメインユーザーアカウントを使用してログインします。
 - 2 Windows の設定で、デバイス > プリンターとスキャナーを開き、プリンターまたはスキャナーを追加しますをクリックします。
 - 3 リストから必要なプリンターを選択します。リストにない場合、プリンターが一覧にない場合をクリックし、追加する共有プリンター名を参照または入力します。プリンターが追加されたら、テストページを印刷します。
 - 4 Windows のプリンター設定で、共有プリンターをローカルの通常使うプリンターに設定します。



4 オプションの手順

オフラインマシンのパフォーマンス向上 46

NIST ライブラリ検索の設定 47

セキュリティ保護されたファイルシステムパスの変更 48

オフラインマシンのパフォーマンス向上

OpenLab CDS を実行するコンピューターは、インターネットに接続されていないとパフォーマンスが低下する場合があります。

Windows オペレーティングシステムには、セキュアソフトウェアの使用時に Windows セキュリティ証明書をすべて更新するために、常にオンライン接続を検索するルーチンが組み込まれています。

この問題を解決するには、すべてのワークステーション上で以下のシステム設定を使用してください。

- 1 Windows の設定で、インターネット オプションを検索します。
インターネットのプロパティダイアログが表示されます。詳細設定タブで、以下のチェックボックスをオフにします。
 - セキュリティ > 発行元証明書の取り消しを確認する
 - セキュリティ > サーバーの証明書失効を確認する
- 2 以下のレジストリキーを変更または追加します。
 - [HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Policies¥Microsoft¥SystemCertificates¥AuthRoot]
"DisableRootAutoUpdate"=dword:00000001
 - [HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥Policies¥Microsoft¥SystemCertificates¥AuthRoot]
"DisableRootAutoUpdate"=dword:00000001
- 3 ルート証明書をオフにしたことを記録します。これにより OpenLab CDS インストーラが失敗します。インストールが失敗しないようにするにはルート証明書をオンにする必要があります。

NIST ライブラリ検索の設定

OpenLab CDS 内で MS ライブラリ検索を使用するには、ライブラリ検索を実行するワークステーション（または、クライアント/サーバー設定、クライアントまたは AIC）に NIST MS Search プログラムがローカルでインストールされている必要があります。

スタンドアロン、クライアント/サーバー、または Citrix/リモートデスクトップサービスサーバー設定内での NIST ライブラリフレームワークのインストールおよびコンフィグレーションの詳細については、『[Setup and Configuration of MS Library Search \(CDS_Configure_MS_Libraries.pdf, D0020932\)](#)』を参照してください。このドキュメントでは、他の市販のライブラリやユーザー作成のライブラリと OpenLab CDS MS ライブラリ検索との併用および管理についても説明しています。

セキュリティ保護されたファイルシステムパスの変更

転送用のファイルをバッファースするために、OpenLab CDS はデフォルトのロケーション **%ProgramData%\Agilent\SecureFileSystem** にフォルダーを作成します。デフォルトのロケーションが不適切な場合、フォルダーパスを変更できます。

セキュリティ保護されたファイルストレージのロケーション変更の詳細については、Agilent のサポート担当にお問い合わせください。

OpenLab CDS は 2 つのライセンス管理方法をサポートします。ライセンスの取得方法は、適用する製品およびリビジョン番号によって異なります。v3.0 で開始すると、OpenLab CDS は電子ライセンスを使用します。

- 電子ライセンス、または Flexnet Operations (FNO)：ライセンスは電子メールで届きます。
- SubscribeNet ライセンス：薄紫色の封筒に入った認証コードが届きます。

電子ライセンスと SubscribeNet ライセンスを同時に管理できます。電子ライセンスは、Agilent オンラインアカウントを介して、OpenLab Control Panel でライセンス認証および管理されます。

試用期間

インストール後 60 日の試用期間は、システムを実行できます。試用期間経過後は、ライセンスをインストールする必要があります。

OpenLab Control Panel を初めて起動し、**トライアルを開始**をクリックすると試用期間が開始されます。

ライセンスタイプ

OpenLab CDS 電子ライセンスは、他の Agilent 製品に必要な従来の SubscribeNet（クラシック）ライセンスと並行して、OpenLab Control Panel で管理されます。

クライアント/サーバー CDS クライアント/サーバー構成では、Agilent および Agilent 以外の機器用の **機器接続**ライセンスに加えて、新たに **OpenLab CDS システム**ライセンスが必要です。OpenLab Server/ECM XT または OpenLab Shared Services サーバーは必須です。これらのライセンスは、これまで通り SubscribeNet で管理されます。

カウントライセンス このライセンスは、OpenLab CDS のフローティングライセンス方法の一部であり、どのコンポーネントにも恒久的に割り当てられるものではありません。AIC および機器などのコンポーネントが起動している間、これらに自動的に割り当てられます。このライセンスは、コンポーネントを切断したときに自動的に返却されます。ライセンス管理プログラムでは、ライセンスの発行や取得を管理します。

この場合は、コンポーネント実行中のみライセンスが使用されます。インストールする各コンポーネントにではなく、同時に実行するすべてのコンポーネントに十分な数だけのライセンスを購入すればよいことになります。

電子ライセンスの認証

ライセンス認証の準備

電子ライセンスを受け取るには、以下が必要となります。

- ・ ご購入の際、ソフトウェア連絡担当者として記名されていること。記名者が利用できなくなった場合には、Agilent の営業担当者にお問い合わせください。
- ・ ソフトウェアを有効にするエンタイトルメント情報を含む電子メールを受信していること。

オンラインでライセンス認証するには、Agilent のライセンスポータルへのアクセスが必要です。URL とファイアウォールポートの情報については、『[OpenLab CDS の要件とサポートする機器 \(CDS_v3.0_Requirements_ja.pdf, D0028027ja\)](#)』を参照してください。これらのポート ³ を使用している Agilent 以外のアプリケーションがある場合は、Agilent OpenLab ソフトウェアパッケージをオンラインで有効にする前にアンインストールしてください。

オンライン認証

- 1 ライセンスをインストールしたいシステムに接続されているマシンから、コントロールパネルを起動します。
- 2 管理 > ライセンスの順に選択します。
- 3 電子ライセンスの管理を選択します。
- 4 リボンからライセンスの管理をクリックします。
ウェブブラウザで、ライセンスインターフェイスが開きます。
- 5 オンライン認証を選択します。
- 6 エンタイトルメント ID または ライセンス認証 ID（アクティベーション ID）を選択します。

³ OpenLab CDS 3.0 の場合：ポート 52080、52088、7070、7071

ライセンス 電子ライセンスの認証

エンタイトルメント ID：エンタイトルメント ID を利用すると、利用可能なすべてのライセンスをアクティブ化できます。

エンタイトルメント ID は、オフライン認証には使用できません。

アクティベーション ID：アクティベーション ID を利用すると、同じオーダー内の購入数および購入製品を細かく管理できます。

7 対応する ID を入力します。

8 エンタイトルメント ID の場合：すべて有効化をクリックします。

ライセンス認証 ID の場合：認証するライセンスの数を入力し、有効にするをクリックします。

認証画面に、ID、製品名、数量などすべてのライセンス詳細の概要が表示されます。

オフライン認証

前提条件

- ・ エンタイトルメント情報の電子メールから
ライセンス認証 ID（アクティベーション ID）を入手します。
 - ・ 手元のデバイスで、[Agilent オンラインアカウント](#)にログインが可能であることを確認します。
- 1 ライセンスをインストールしたいシステムに接続されているマシンから、コントロールパネルを起動します。
 - 2 管理 > ライセンスの順に選択します。
 - 3 電子ライセンスの管理を選択します。
 - 4 リボンからライセンスの管理をクリックします。
ウェブブラウザで、ライセンスインターフェイスが開きます。
 - 5 オフライン認証を選択します。
 - 6 アクティベーション ID フィールドにアクティベーション ID を入力します。
 - 7 アクティブ化したいライセンスの数を入力します。

8 +をクリックします。

テーブルに、ID、製品名、有効期限、総数などすべてのライセンス詳細の概要が表示されます。

注記

さらに別のライセンスを追加するには、ステップ6～8を繰り返します。

同じライセンス認証 ID を入力すると、テーブルの対応する行が上書きされます。テーブルのライセンス認証 ID の既存数量を更新するには、**総数列**の値を編集します。

9 アクティベーションリクエストの生成をクリックします。

アクティベーションリクエスト ファイルが生成され、デフォルトのダウンロードフォルダーに保存されます。表示が **アクティベーションレスポンスのインストール** タブに自動的に切り替わります。

10 アクティベーションリクエスト ファイルをインターネットに接続されたデバイスに転送します。

11 このデバイスから、[Agilent オンラインアカウント](#)にログインします。 ライセンスと契約 (License and Agreements) タブにある任意のエンタイトルメント上で、オフラインでライセンス認証 (Activate Offline) をクリックします。

12 デバイス > オフラインデバイス管理 に移動します。

13 ライセンスの生成を選択し、アクティベーションリクエストファイルをアップロードします。

レスポンスが正常に生成されたら、それを通知するメッセージが表示されます。

入力したライセンスの数が利用可能なライセンス数を超えている場合は、**ライセンス認証 ID の数が利用可能数を超えています**のエラーメッセージが表示され、認証は続行できません。

14 アクティベーションレスポンス ファイル (capabilityResponse.bin) をダウンロードし、ライセンスをアクティブ化したいソフトウェアがインストールされているデバイスに再度転送します。

15 アクティベーションレスポンスのインストールタブに、アクティベーションレスポンスファイルをアップロードします。

16 アクティベーションレスポンスのインストールをクリックします。

これでライセンスが認証されます。

オンラインライセンス返却

- 1 ライセンスを返却したいシステムに接続されているマシンから、コントロールパネルを起動します。
- 2 管理 > ライセンスの順に選択します。
- 3 電子ライセンスの管理を選択します。
- 4 リボンからライセンスの管理をクリックします。
ウェブブラウザで、ライセンスインターフェイスが開きます。
- 5 オンライン認証を選択します。

すべてのライセンスを返却：

- 1 エンタイトルメント ID を選択します。
 - 2 エンタイトルメント ID を入力します。
 - 3 すべて返却をクリックします。
- ✓ すべてのライセンスが無効になると、ソフトウェアでも無効になります。試用期間が残っている場合は、引き続き使用できます。

ライセンスの一部を返却：

- 1 ライセンス認証 ID を選択します。
- 2 認証された総数列で、保持したいライセンスの数を入力します。「0」を入力すると、このライセンス認証 ID のライセンス（カウント数）をすべて返却することになります。
- 3 更新をクリックします。

オフラインライセンス返却

- 1 ライセンスを返却したいシステムに接続されているマシンから、コントロールパネルを起動します。
- 2 管理 > ライセンスの順に選択します。
- 3 電子ライセンスの管理を選択します。
- 4 リボンから**ライセンスの管理**をクリックします。
ウェブブラウザで、ライセンスインターフェイスが開きます。
- 5 オフライン認証を選択します。
- 6 アクティベーション ID を選択し、アクティブ化総数列で、残しておきたいライセンスの数を入力します。「0」を入力すると、このアクティベーション ID のライセンス（カウント数）をすべて返却することになります。
更新をクリックします。
- 7 アクティベーションリクエストの生成をクリックします。
アクティベーションリクエスト ファイルが生成され、デフォルトのダウンロードフォルダーに保存されます。表示が **アクティベーションレスポンスのインストール** タブに自動的に切り替わります。
- 8 アクティベーションリクエスト ファイルをインターネットに接続されたデバイスに転送します。
- 9 このデバイスから、[Agilent オンラインアカウント](#)にログインします。
ライセンスと契約（License and Agreements） タブにある任意のエントリメント上で、オフラインでライセンス認証（Activate Offline） をクリックします。
- 10 デバイス > オフラインデバイス管理 に移動します。
- 11 ライセンスの生成を選択し、アクティベーションリクエストファイルをアップロードします。
レスポンスが正常に生成されたら、それを通知するメッセージが表示されます。

ライセンス

電子ライセンスの認証

- 12 アクティベーションレスポンス ファイル（`capabilityResponse.bin`）をダウンロードし、ライセンスをアクティブ化したいソフトウェアがインストールされているデバイスに再度転送します。
- 13 アクティベーションレスポンスのインストールタブに、アクティベーションレスポンスファイルをアップロードします。
- 14 アクティベーションレスポンスのインストールをクリックします。
- 15 表示が自動的に 3 つ目のタブ、**ライセンス認証の確認**に切り替わります。ライセンス認証の確認ファイルが自動的にデフォルトのダウンロードフォルダーにダウンロードされます。

そのライセンス認証の確認（Activation Confirmation） ファイルを FlexNet Operations Portal に接続されているデバイスに移動します。
- 16 FlexNet Operations Portal の **Offline Device Management** から、**Generate license or confirm license reduction or return** を選択します。
- 17 ライセンス認証の確認ファイルをアップロードします。

ライセンス返却は完了です。

注記

元のライセンス認証の確認ファイルの場所がわからない場合は、ライセンスインターフェイスの**ライセンス認証の確認**タブから新しいものをダウンロードできます。

ソフトウェアアップデートの確認

資格情報を有効化したら、対象製品のソフトウェアアップデートがないか確認してください。アップデートは、ソフトウェアダウンロードセクションから、Agilent オンラインアカウントで入手できます。ReadMe ファイルを開き指示に従ってください。

SubscribeNet ライセンス

SubscribeNet は、<https://agilent.flexnetoperations.com> 経由のオンラインで管理、維持します。

ライセンスファイル

ライセンスファイルには、お客様のソフトウェアライセンスが含まれています。ライセンスファイルには、製品、機器、およびアドオンライセンス（またはライセンス認証キー）が含まれます。ライセンスファイル情報には、お使いのシステムで同時に使用可能な機器およびその他のオプションの数が定義されます。

ライセンスファイルは、ライセンスサーバー、すなわちクライアント/サーバーシステムのサーバーにインストールされます。ライセンスファイルは対象のサーバーアドレスに制約されており、別のサーバーへの移動は、SubscribeNet でライセンスの再作成が必要です。

ライセンスを取得する

注記

このプロセスでは、ライセンスサーバーの MAC アドレスを入力する必要があります。ワークステーションの場合、これはローカルコンピュータです。クライアント/サーバーシステムの場合、これはサーバーです。

SubscribeNet でライセンスの作成、ダウンロードおよびインストール

インターネットにアクセスできない場合は、[ライセンスを取得する他の方法](#) 60ページ のセクションを参照してください。

SubscribeNet にまだ登録していないユーザーの場合は、新規ユーザーセクションから行ってください。

SubscribeNet に登録済みの場合は、FlexNet Operationsで登録済みのユーザーセクションを参照してください。

準備 事前に用意するもの：

- Software Entitlement Certificate が入った薄紫色の封筒で提供される認証コードラベル。薄紫色の封筒を受け取っていない場合、販売店または弊社のサポート窓口にお問い合わせください。
- Software Entitlement Certificate に記載されている SubscribeNet の URL。
- コントロールパネルがインストールされているコンピューターの MAC アドレス、およびホスト名。

ソフトウェアがインストール済みのコンピューターから MAC アドレスを取得するには、コントロールパネルを開き、**管理 > ライセンス** セクションを参照してください。**MAC アドレスのコピー**または**MAC アドレスの保存**から、ライセンス作成のための MAC アドレスを入手します。

注記

ライセンスをインストールした後にコンピューター名または参照ドメインが変更された場合、ライセンスを削除し、SubscribeNet で新しいライセンスを作成してダウンロード、インストールしてください。

注記

ライセンス作成時に使用した MAC アドレスを持つネットワークアダプタがマシンから外されると、お使いのライセンスは有効ではなくなります。新しいライセンスは、ライセンスサーバー上で現在利用可能な MAC アドレスを使用して作成する必要があります。

新規ユーザー

- 1 <https://agilent.flexnetoperations.com/> にアクセスして製品を登録してください。
- 2 登録ページで、ラベルに記載されている認証コードを入力し、プロフィール情報を入力してください（必須項目は*で表示されています）。
ここで入力する電子メールアドレスが、ログイン ID になります。
- 3 **Submit** をクリックします。システムによってアカウント名が生成され、表示されます。
ユーザーのログイン ID およびパスワードが記載された「ようこそ」メールが、SubscribeNet から送信されます。
- 4 ログイン ID とパスワードを使用して SubscribeNet にログインします。

ログイン後、不明な点がある場合は、オンラインユーザーマニュアルへのリンクを参照してください。

- 5 左のナビゲーションバーから、**ライセンスの作成または表示**を選択してください。
- 6 新しいライセンスを作成するため、画面の指示に従ってください。コンピュータのホスト名の入力が必要です。

サーバーのホスト名を入力してください。入力したマシン名には、DNS サフィックス (domain.com) を含めないでください。
- 7 システムによりライセンスが作成される際には、その詳細を確認し、**ライセンスファイルのダウンロード**をクリックします。ライセンスファイルは、コンピュータおよびバックアップ先（外付け記憶装置など）に保存してください。

ライセンスファイルの再生成、新しい認証コードの追加、またはシステムに応じたライセンスの追加設定を行うために Agilent SubscribeNet サイトに再度アクセスする際は、ログイン ID とパスワードを使用してください。

SubscribeNet で登録済みのユーザー

- 1 SubscribeNet アカウントをすでにお持ちの場合は、
<https://agilent.flexnetoperations.com/> を使用します。

SubscribeNet パスワードが不明な場合
<https://agilent.flexnetoperations.com/control/agil/password> から再発行手続きを行ってください。
- 2 複数のアカウントがある場合は、Authorization Code（認証コード）に関連している SubscribeNet アカウントを選択します。
- 3 SubscribeNet ナビゲーションペインから、**認証コードで登録**を選択します。

これにより、新しい認証コードを登録し、新しいライセンスを取得できます。
- 4 左のナビゲーションバーから、**ライセンスの作成または表示**を選択してください。
- 5 新しいライセンスを作成するため、画面の指示に従ってください。コンピュータのホスト名の入力が必要です。

ライセンス

SubscribeNet ライセンス

サーバーのホスト名を入力してください。入力したマシン名には、DNS サフィックス (domain.com) を含めないでください。

- 6 システムによりライセンスが作成される際には、その詳細を確認し、**ライセンスファイルのダウンロード**をクリックします。ライセンスファイルは、コンピュータおよびバックアップ先（外付け記憶装置など）に保存してください。

ライセンスファイルの再生成、新しい認証コードの追加、またはシステムに応じたライセンスの追加設定を行うために Agilent SubscribeNet サイトに再度アクセスする際は、ログイン ID とパスワードを使用してください。

ソフトウェアアップデートの確認

SubscribeNet に認証コードを登録したら、製品に対してリリースされたソフトウェアアップデートがないか確認してください。アップデートが利用できる場合、ReadMe ファイルを開いて指示に従ってください。

ライセンスを取得する他の方法

ライセンスを作成できない場合は、最寄りの Agilent テクニカルサポートオフィスに連絡してください。担当者が、お客様の地域での OpenLab ライセンス作成フォームの提出方法を案内します。

オフラインライセンス

ラボでインターネットを利用できない場合：

お客様自身またはローカルオンサイトサービスエンジニアが必要な情報を収集し、Agilent がお客様のためにライセンスアカウントを作成できるようになります。お住まいの地域での電話サポートについては、販売店またはサービスセンターにご連絡ください。連絡先情報については、付録を参照してください。

Agilent ライセンスサポートのご利用に必要な顧客情報

お客様に代わってライセンスアカウントを作成できるよう、以下の必須情報を Agilent に提供してください。

1 アカウント情報の収集：

アカウント名は、会社名とラボ名をコンマで区切ったものです。ここで提供された従業員情報は、将来のシステムアクセスに必要な最初のアカウント管理者を設定するために使用されます。サービスを迅速に提供するため、以下の情報をあらかじめ準備のうえ、お近くの Agilent 販売店またはサービスセンターにご連絡ください。

- 会社名
- ラボラトリー/部門名
- 名
- 姓
- 電子メールアドレス
- 役職名
- 電話番号
- 国名、郵便番号、都道府県名、市町村名を含めた住所

2 認証コードの収集：

認証コードは、薄紫色の封筒に入ったラベルで提供される英数字のコードです。複数のコードを受領した場合、すべての注文したライセンスがユーザーのアカウントに必ず付与されるように、すべてのコードを提供してください。

3 ライセンスを受け取る

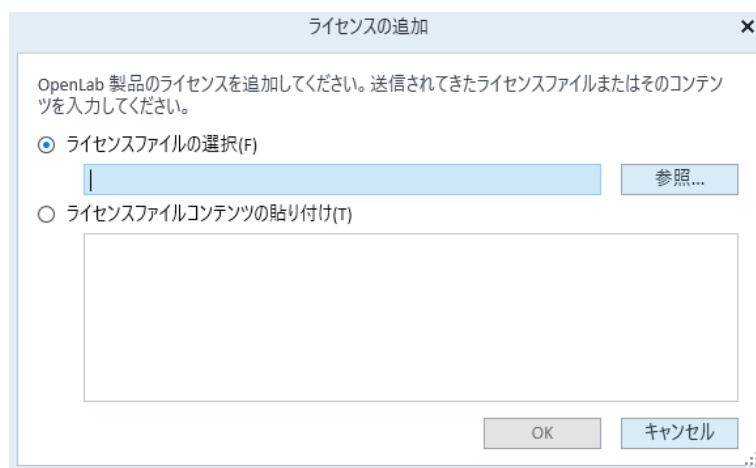
上記の情報をご提供いただいた後、Agilent ではお客様の代理で SubscribeNet 経由でライセンスを作成します。ライセンスファイルは、発送先住所に（CD で）送付されるか、または現地の FSE が直接（通常 USB メモリで）お届けします。ライセンスを受け取ったら、以下の「ライセンスのインストール」セクションに従って、システムへのライセンスインストールを完了してください。

ライセンスのインストール

ライセンスはコントロールパネルを使用してシステムに追加する必要があります。

権限

- ・ システム管理 > システムコンポーネントの管理
- 1 ライセンスをインストールしたいシステムに接続されているマシンから、コントロールパネルを起動します。
- 2 管理 > ライセンスに移動します。
- 3 SubscribeNet ライセンスの管理を選択します。
- 4 リボンで、ライセンスの追加 **+** をクリックします。



- 5 ライセンスのインストール方法を、以下から選択してください。
 - ・ ライセンス生成時に、SubscribeNet で保存したライセンスファイル (.lic) をライセンスファイルオプションで開きます。
 - ・ ライセンステキストオプションを選択し、受信したテキストファイルからライセンステキストをコピーして、ライセンス入力フィールドに貼り付けます。
- 6 OK をクリックします。

コントロールパネルの**管理**インターフェイスに、インストールライセンスのステータスが表示されます。

注記

ライセンスを有効にするために、再起動してください。

6 OpenLab CDS Workstation Plus の コンフィグレーション

OpenLab Control Panel 64

認証の設定 65

セキュリティポリシーの設定 67

ユーザーおよびロールの設定 68

ユーザーの作成またはインポート 68

グループ 69

ロールと権限 70

ロールにユーザーまたはグループを追加 71

個別機器またはプロジェクトに関する特定のロール 72

初期プロジェクトの設定 73

初期機器のコンフィグレーション 74

コントロールパネルのその他の設定 75

OpenLab Control Panel

すべてのコンフィグレーションタスクは OpenLab Control Panel で実行します。詳細については、『[OpenLab Help & Learning](#)』のコントロールパネルセクションを参照してください。

認証の設定

OpenLab CDS では、以下の認証プロバイダーをサポートしています。

- 内部

内部モードでは、ユーザーの資格情報が OpenLab CDS システムに保存されます。その他のユーザーをセットアップする前に、OpenLab CDS の管理者アカウントを作成するよう促されます。システムに新規ユーザーを作成できるのは内部モードのみです。その他のモードでは、別のシステムに存在するユーザーへのマッピングのみを行えます。

- Windows ドメイン

既存の Windows ユーザーを OpenLab CDS システムにインポートします。この認証は、Windows Active Directory ドメイン、または Enterprise 内の NT 4.0 ドメインで行われます。OpenLab CDS は、割り当てたユーザーの ID およびパスワードのみを使用します。OpenLab CDS のロールと権限はコントロールパネルで設定します。

インストールが終了すると、内部認証がデフォルトで設定されます。内部認証を使用する場合は何も行う必要はありません。以下の手順では、ドメイン認証を設定する方法について説明します。

- 1 コントロールパネルを起動します。ユーザー名 `admin` と、インストール時に指定したパスワードでログインします。
- 2 管理に移動します。
- 3 ナビゲーションウィンドウのシステムコンフィグレーションを選択します。
- 4 リボン内のシステム設定の編集  をクリックします。
- 5 認証プロバイダーのドロップダウンリストから **Windows ドメイン** を選択し、次へをクリックします。

注記

ストレージタイプは変更しないでください。

- 6 [ドメインユーザーを使用して...] チェックボックスをオンにし、ユーザーとグループの情報を取得する権限を持つユーザー資格情報を入力します。アカウントの選択をクリックしてユーザーの検索ダイアログを開き、管理者アカウントを選択します。
- 7 設定を確認します。完了すると、コントロールパネルが再起動します。

セキュリティポリシーの設定

特定の基準（21 CFR Part 11 など）に準拠する必要がある場合、必要に応じてセキュリティポリシーを調整してください。

認証プロバイダーが内部である場合、すべてのパラメータをコントロールパネルで設定できます。

外部の認証プロバイダー（Windows ドメイン）を使用すると、アプリケーションをロックするまでの時間の設定やシングルサインオンの有効化を設定できます。その他のパラメータはすべて外部システムによって定義されます。

- 1 コントロールパネルを起動し、**管理**へ移動します。
- 2 ナビゲーションウィンドウの **セキュリティポリシー** を選択します。
- 3 リボン内の **セキュリティポリシーの編集** をクリックします。
- 4 必要に応じてパラメータを設定し、変更を確認します。
コントロールパネルを再起動して変更を適用します。

注記

21 CFR Part 11 の要件を満たすには、**パスワード有効期間** を 180 日以下に設定してください。その他のデフォルト値は21 CFR Part 11 に準拠していますので、変更しないでください。

ユーザーおよびロールの設定

ユーザーが表示や実行できる内容を定義するために、OpenLab CDS では定義済みのロールを提供しており、ユーザーに特定のロールを定義することができます。

各ロールには、多くの特定の権限が定義されています。そのためカスタマイズロールを設定するときは、上位ロールから権限を削除するよりも、下位ロール（権限が少ない）に特定の必要な権限を追加することをお勧めします。

1 人のユーザーが複数グループのメンバーである場合もあります。各グループに対して 1 つ以上の特定のロールを割り当てる必要があります。1 人のユーザーに対してロールを割り当てることもできますが、簡素化のためロールの割り当てはグループレベルで行うことを推奨します。グループのすべてのメンバーには、そのグループのすべてのロールが自動的に割り当てられます。

- 1 コントロールパネルを起動し、**管理**へ移動します。
- 2 ナビゲーションウィンドウの **ユーザー**、**グループ**、または **ロール**を選択します。
- 3 新規項目を作成するか、既存の項目を編集します。

ユーザーの作成またはインポート

内部認証を使用する場合、コントロールパネルで必要なユーザーを作成します。外部認証システムとして Windows ドメインを使用する場合は、Windows ドメインユーザーをインポートします。

ユーザーの追加（内部認証のみ）

- 1 ナビゲーションウィンドウから**管理** > **ユーザー**をクリックします。
- 2 リボン内の**ユーザーの作成**をクリックします。
- 3 **ユーザーの作成**ダイアログで、関連するパラメータを入力します。

- ・ 新規ユーザーの名前とパスワードを入力します。
- ・ デフォルトでは、新規ユーザーは次回ログイン時にパスワードを変更する必要があります。パスワードを変更する必要がない場合は、**ユーザーは次回ログイン時にパスワードの変更が必要**チェックボックスをオフにします。
- ・ **ロールメンバシップ**タブで、ユーザーを適切なロールに割り当てます。デフォルトロールを使用するか、コントロールパネルの**管理 > ロール**で独自のロールを作成できます。

4 OK をクリックします。

ユーザーのインポート (Windows ドメイン認証のみ)

システムにユーザーを追加するには、ユーザーとグループ情報をドメインから取得する権限を持っている必要があります。

- 1 ナビゲーションウィンドウから**管理 > ユーザー**をクリックします。
- 2 リボン内の**ユーザーのインポート**をクリックします。
- 3 **ユーザーの検索**ダイアログボックスに、Windows ドメインユーザー名の検索文字列を入力します。
- 4 検索結果リストから、インポートするユーザーを選択し、**追加**をクリックします。選択したユーザーが**ユーザーの選択**リストに追加されます。
- 5 ステップ 2 から 4 を繰り返して、インポートするすべてのユーザー名を**ユーザーの選択**リストに追加し、**OK** をクリックします。

グループ

外部認証プロバイダーを利用する場合、外部システムの既存グループをインポートするか、新しく内部グループを作成することができます。マッピングおよび作成できるグループの数に制限はありません。

外部システムまたはコントロールパネルのグループにユーザーを割り当てます。OpenLab CDS にのみ関係のある追加のユーザー割り当てが必要な場合には、コントロールパネルでユーザーを作成します。ユーザー割り当てが必要でない場合は、グループをインポートして、そのグループに必要なロールを割り当てただけで十分です。

グループの削除または割り当てを解除する場合、そのグループのメンバーであるユーザーに対する変更は行われません。

ロールと権限

ロールは権限をユーザーまたはユーザーグループに割り当てるために使用され、全体的にまたは特定の機器やプロジェクト、プロジェクトグループまたはロケーションごとに割り当てることが可能です。システムには定義済みロールのリストが、システムインストールの一部としてインストールされています（たとえば、**機器管理者**、**機器ユーザー**、または**すべて**）。各ロールには、固有の権限が割り当てられています。

権限は、主要な3つのロールタイプ（プロジェクトロール、機器ロール、管理ロール）に従ってグループ化されています。権限をロールに割り当てる場合、まず必要なロールタイプを選択してからそのロールタイプに関連する権限を選択します。各ロールは、特定のロールタイプ1つに対応する権限のみを有します。例外として、定義済みロールの**すべて**だけは、すべてのロールタイプのすべての権限を有します。ユーザーまたはグループがシステム機能を実行するためには、複数のロールが必要な場合があります。例えば、化学者というロールを持つユーザーには、機器を実行する権限を持つ**機器ユーザー**といった別のロールが必要な場合があります。

コントロールパネル内にさまざまなロケーションから成るツリーを作成し、関連するロケーションに機器を追加することが可能です。それぞれの機器や機器グループに、異なった機器ロールを割り当てることができます（**個別機器またはプロジェクトに関する特定のロール** 72ページ も参照してください）。たとえば、ユーザーが1つの機器で**機器管理者**ロールを持ち、別の機器で**機器ユーザー**ロールを持っている場合があります。

コントロールパネルでさまざまなプロジェクトまたはプロジェクトグループから成るツリーを作成し、さまざまなプロジェクトにさまざまなプロジェクトロールを割り当てることもできます（**個別機器またはプロジェクトに関する特定のロール** 72ページ も参照してください）。たとえば、ユーザーがプロジェクトで**プロジェクト管理者**のロールを持つと、コントロールパネルで設定を管理することができます。もう1つのプロジェクトでは、このユーザーはプロジェクトの内容を編集することはできても、プロジェクトの設定を変更することはできないロールになっている場合があります。

権限の詳細については、「付録」を参照してください。

表 5: ロールタイプの説明

ロールタイプ	説明
管理者権限	これらの権限はユーザーまたはグループに対して全体的に割り当てられ、機器、ロケーションレベルで変更することはできません。代表的な管理権限に、バックアップとリストア、セキュリティの管理、プリンタの管理などがあります。
機器権限	これらの権限は、全体的に、または機器、ロケーションレベルで割り当てることが可能です。機器に関する権限には、 機器またはロケーションの表示 や 機器の実行 などがあります。コントロールパネルのロケーションと機器ツリーを閲覧するには、全体のレベルで 機器またはロケーションの表示 の権限が必要となります。
プロジェクト権限	さまざまなレベルのデータへのアクセスまたはその変更を行うための権限。これらの権限はグローバルに、またはプロジェクトあるいはプロジェクトグループレベルで割り当てることが可能です。

ロールにユーザーまたはグループを追加

- 1 ナビゲーションウィンドウから、**管理 > ロール**をクリックします。
- 2 ロールウィンドウで、ユーザーまたはグループに割り当てるロールを選択します。
- 3 リボン内の**ロールの編集**をクリックします。
- 4 **ロールの編集**ダイアログボックスで、**メンバータブ**をクリックします。
- 5 **ユーザーまたはグループの追加**をクリックします。
- 6 **ユーザーおよびグループの検索**ダイアログボックスで、ユーザーまたはグループ名を入力するか、**検索**をクリックして検索条件を満たすすべてのユーザーとグループのリストを表示します。
- 7 検索結果でユーザーまたはグループを選択し、**追加**をクリックします。
- 8 **OK**をクリックします。

個別機器またはプロジェクトに関する特定のロール

デフォルトでは、ユーザーまたはグループのロールは、すべてのロケーション、機器、プロジェクトグループまたはプロジェクトで全般的に設定されます。ロールの設定はそれぞれ、ルートノードの**機器**または**プロジェクト**から継承されます。特定のプロジェクトでユーザーまたはグループに異なるロールを割り当てるには：

1. 該当するプロジェクトを選択します。
2. リボン内の**権限の編集**をクリックします。
3. **権限の編集**ダイアログで、**親からの権限の継承**チェックボックスをオフにします。

その後、特定のノードについてののみ有効となる異なるロールを割り当てる事が可能になります。

個々のロケーションまたは機器で**機器**のロールを割り当てるができます。

プロジェクトを使用すると、**プロジェクト**ロールを個々のプロジェクトグループまたはプロジェクトに割り当てるができます。

管理ロールは、常に全般で設定されます。

初期プロジェクトの設定

- 1 コントロールパネルを起動し、プロジェクトへ移動します。
- 2 リボン内の**作成**をクリックして、新しいプロジェクトを作成します。
- 3 OpenLab CDS プロジェクトの名前、フォルダーパス、および説明を入力します。
- 4 CDS 設定タブで、
 - ・ 必要なファイルロケーションを入力します。
 - ・ そのプロジェクトに対して必要な監査証跡設定を行います。

詳細については、「OpenLab Help & Learning」の「コントロールパネル」セクションを参照してください。

初期機器のコンフィグレーション

- 1 コントロールパネルを起動し、機器へ移動します。
- 2 リボンから作成をクリックし、新しい機器を作成します。
- 3 機器を選択し、リボンから機器のコンフィグレーションをクリックします。
- 4 自動コンフィグレーション（利用可能な場合）を使用して機器をコンフィグレーションすることを推奨します。自動コンフィグレーションをクリックして、機器の IP アドレスまたはホスト名を入力します。

詳細については、「OpenLab Help & Learning」の「コントロールパネル」セクションを参照してください。

コントロールパネルのその他の設定

コントロールパネルのその他の設定として次のことが行えます。

- 機器ステータスのレポート頻度の変更
- プロジェクトの監査証跡設定の変更
- プロジェクトの署名レベルの編集

詳細については、「OpenLab Help & Learning」の「コントロールパネル」セクションを参照してください。

7 OpenLab CDS ソフトウェアについて

ソフトウェアアーキテクチャ 77

Workstation Plus 上のコンポーネント 78

インストールされるコンポーネント 79

21 CFR Part 11 のコンプライアンス 81

データセキュリティ 81

データの整合性 81

監査証跡 82

カスタマイズ 83

カスタム計算によるカスタマイズ 83

レポートテンプレートによるカスタマイズ 83

外部プログラムを起動するようアプリケーションをカスタマイズ 84

生データと結果のエクスポート 84

ソフトウェアアーキテクチャ

OpenLab CDS は、分析ワークフロー用のデータシステムソリューションです。GC および GC/MS（シングル四重極）に加え、LC、LC/MS（シングル四重極）、LC/MS TOF および LC/MS Q-TOF を含めたさまざまな機器を制御することができます。集中型システム管理によってクロマトグラフィとシングル四重極質量分析を拡張可能なひとつのソリューションに統合します。これにより、ラボのワークフローを合理化して、生産性を最大限に高めることができます。

Agilent OpenLab CDS ソフトウェアは Agilent オンラインアカウントからダウンロードできます。次のものが含まれます。

- 測定
- データ解析 および レポート
- Shared Services
- Secure Storage
- Custom Calculation Editor
- ユーザーマニュアルを含む Help & Learning プラットフォーム
- Agilent LC、GC、LC/MS、LC/MS (Q-)TOF、GC/MS、A/D 用の機器ドライバーソフトウェア
- Virtual Instruments の機器ドライバーソフトウェア (Data Player)
- Agilent Parts Finder
- サードパーティ製ツール

Workstation with Secure Storage では、すべてのコンポーネントが 1 台の PC にインストールされます。結果は、コンテンツ管理コンポーネントによりインストールされるデータベースに保存されます。ユーザーは、ローカルファイルシステムを介してデータにアクセスできません。システムは、最大 4 台の機器接続をサポートします。



ワークステーション

図 2: Workstation Plus と機器

Workstation Plus 上のコンポーネント

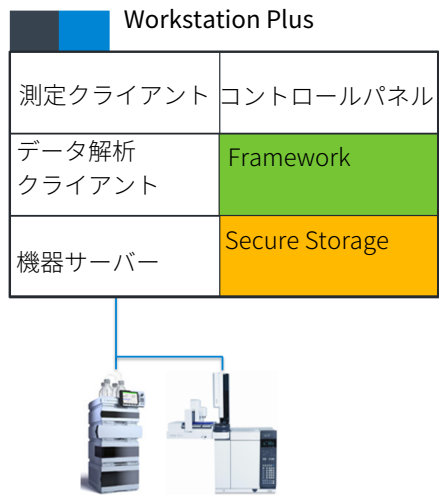


図 3: Workstation Plus 上のコンポーネント

測定クライアント	コンフィグレーションされた機器で生データを取り込みます。
データ解析クライアント	取り込んだデータを解析します。
機器サーバー	コンフィグレーションされたすべての機器への接続を制御します。
コントロールパネル	Shared Services コントロール機能にアクセスするためのユーザーインターフェイスです。

Framework	再利用可能な OpenLab CDS サービス、コンポーネント、およびツールです。
Secure Storage	コンテンツ管理コンポーネントで、データベースおよび Content Browser を提供しています。

インストールされるコンポーネント

以下の Agilent のコンポーネントは、OpenLab CDS システムと一緒にインストールされます。インストールされるコンポーネントは、インストールのタイプ（ワークステーション、クライアント、AIC、またはサーバー）によって異なります。

- OpenLab Backup Utility と OpenLab Restore Utility
OpenLab システムのバックアップおよびリストア操作のツールセット。
- OpenLab CDS
コアアプリケーション。
- OpenLab CDS 機器ドライバー
詳細は、ドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレードを参照してください。
- OpenLab CDS eMethod ツール
eMethods をインポートできます。
- OpenLab Certificate Service と OpenLab Certificate Service Tool
民間の証明書が利用できない場合に、ネットワークトラフィックを保護するためのソリューション。ワークステーションでは使用しません。
- OpenLab CopyTo Server および OpenLab CopyTo Client
出力先フォルダーを管理します。
- OpenLab Data Collection Service と OpenLab Data Collection Agent
分散システムでシステムおよびトポロジー関連の情報を収集します。
- OpenLab Data Repository
システムアクティビティログおよびその他のソフトウェアコンポーネントにより、診断およびトポロジー関連の情報を保存するために使用されるストレージインフラストラクチャ。
- OpenLab Reverse Proxy
OpenLab コンポーネントへセキュリティで保護された通信を提供します。

- Openlab SDMS と Secure Storage
コンテンツ管理に関連した複数のコンポーネント。
- OpenLab Storage Client Services
- OpenLab Shared Services
システムコンフィグレーション、セキュリティ、アプリケーション設定、ライセンス、および通知機能を提供するサービスおよびツールのセット。
- Software Verification Tool
使用するシステムが正しく構築およびインストールされ、設計仕様通りになっていることを示す文書が提供されます。
- Test Services
以前は QualA でした。データリポジトリと通信します。

21 CFR Part 11 のコンプライアンス

電子記録とコンピュータ制御システムに関する FDA の規定およびガイドラインを満たすには、安全なデータ処理の基本について理解することが重要です。

- **データセキュリティ:** システムへのアクセスを制限し、無許可アクセスを防止することで、データを物理的に保護します。
- **データ整合性:** 生データおよびメタデータを保護して無許可修正を防止し、生データと結果をリンクさせて元の結果をいつでも再生します（規制下の場合、新しい結果のコピーをそれぞれ書面化する場合など）。
- **監査証跡:** 結果に対して誰がいつ何を行ったかを文書化し、元の生データに新しい再解析バージョンを追加したユーザーを追跡します。

データセキュリティ

セキュリティ関連の Shared Services 機能には以下が含まれます（詳しくは [コントロールパネル](#) 86ページ を参照してください）。

- システムアクティビティログ
- 認証プロバイダーの選択
- ユーザー、グループ、ロール、および権限の管理
- セキュリティポリシー

データの整合性

OpenLab CDS は、21 CFR Part 11 に準拠する方法でデータを保存します。これにより、アクセスコントロールおよび監査証跡機能のある安全なデータ保存を提供します。データファイルは、データの整合性とトレーサビリティを確保するためにバージョン化されています。また、OpenLab CDS では電子署名を利用してデータにサインオフすることが可能です。

監査証跡

監査証跡には次のタイプがあります。

- シーケンスの監査証跡は、データの測定時にシーケンスに対して行われた変更の記録です。
- メソッドの監査証跡は、サンプルプレップメソッド、測定メソッド、または解析メソッドに加えられた変更の詳細リストを提供します。
- 注入データの監査証跡は、分析中およびデータ解析のすべての変更を一覧表示したシングル注入の記録です。
- 結果セットの監査証跡は、シーケンス/結果セットに含まれるすべての注入データの監査証跡のスーパーセット（上位集合）です。

監査証跡の具体的な動作は、コントロールパネルでのプロジェクト設定によって変わります。

カスタマイズ

OpenLab CDS は、さまざまなワークフローやアプリケーションをサポートするようにカスタマイズできます。カスタマイズ機能はさまざまな方法で利用できます。

ツールの使用方法の詳細については、『[OpenLab Help and Learning](#)』を参照してください。

カスタム計算によるカスタマイズ

データ解析は、追加の値を計算することで機能を強化することができます。Custom Calculation Editor で計算され、解析メソッドから参照されるか、解析メソッドに埋め込まれます。

これらの計算は非常に複雑になることがあります。計算結果はデータ解析に直接表示されるため、レポートを作成する必要はありません。

カスタム計算は、結果セット単位で処理されます。これらは結果セットのすべての注入データを解析する場合のみ計算されます。

レポートテンプレートによるカスタマイズ

レポートテンプレートで、メソッド固有のカスタム計算結果を呼び出したり、テンプレート固有の追加の計算式を定義したりできます。テンプレート固有の値は、レポートプレビューまたは最終レポートにのみ表示されます。

レポートは、注入データレベル、結果セットレベル、複数の結果セットに対して作成されます。レポートを使用して、上述のすべてのレベルの結果評価を自動で行うことができます。

アプリケーションでは石油化学製品や医薬品用の一般的なレポートテンプレートを提供しています。このテンプレートはデータ解析にインポートできます（「[OpenLab Help & Learning](#)」のデフォルトテンプレートのインポートを参照）。

外部プログラムを起動するようアプリケーションを カスタマイズ

カスタマイズ機能によって、OpenLab Data Analysis のデータ選択やデータ解析ビューにリボングループやアイコンを追加できます。

外部プログラムをアイコンから起動し、プロジェクトデータパスや現在の注入データのパスをパラメータとしてプログラムに引き渡すことが可能です。

カスタマイズは、ドライブ:\ProgramData\AgilentTechnologies\OpenLab DataAnalysis\ のファイル CustomToolsConfiguration.xml を基にユーザーが作成します。例として CustomToolsConfiguration.xml ファイルがメディアの Setup\Tools\Support\UCL\Customization フォルダにあります。

詳細については、OpenLab Help & Learning を参照してください。

生データと結果のエクスポート

データ解析により、解析メソッドの一部としてポスト解析用プラグインを実行することができます。これらのポスト解析用プラグインでは、シングルランおよびシーケンスランの解析の一部として生データや結果をエクスポートすることが可能です。スクリプトは、以下の形式にエクスポートできます。

- OpenLab ChemStation エクスポート (.D/.ch 形式)
- AIA エクスポート (OpenLab CDS の生データとピーク結果を AIA Chromatography Data Standard Specification V1.0 で規定されている netCDF (Rev. 3.4) 形式)
- ASR エクスポート (OpenLab CDS の生データを ASR (Analytical Studio Reviewer) ファイル形式)
- OpenLab CDS データエクスポート (ACE 用の .dx ファイル)
- CSV エクスポート (OpenLab CDS の生データをカンマ区切り .csv ファイル形式)

Allotrope Data Format (ADF) プラグインなどのその他のプラグインは SubscribeNet 経由で入手できます。

8

システム設定およびメンテナンス

コントロールパネル 86

Shared Services メンテナンス 87

バックアップとリストアに関する重要な情報 88

バックアップのコンテンツ 89

必要な領域 89

コンフィグレーション 89

バックアップログ 90

障害復旧プランの作成 90

バックアップ手順 92

バックアップ中のウィルス対策スキャン 92

暗号化 93

バックアップユーティリティの使用 94

PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート 101

PostgreSQL データベースのカスタムデータディレクトリの設定 103

リストア手順 104

リストアログ 104

既存の OpenLab CDS システムのリストア 105

アクティビティログインデックスのマニュアル再構築 107

リストアバリデーション 108

ルーチンメンテナンス 110

トラブルシューティング 111

OpenLab CDS PC の動作が遅い 111

ソフトウェアの最初のインスタンスを開くのが遅い 111

コントロールパネル

コントロールパネルを使用すると、セキュリティポリシー、コンフィグレーションの一元管理、およびラボステータスの一覧表示などの Shared Services コントロール機能にアクセスできます。

機能にアクセスするには特定の権限が必要な場合があります。

コントロールパネル機能の詳細については、[OpenLab Help & Learning](#) を参照してください。

Shared Services メンテナンス

Shared Services メンテナンスプログラムは、OpenLab ソフトウェアと同時に自動的にインストールされ、管理者がシステムを管理するために使用します。

ユーティリティを開くには、**スタート > (すべてのアプリ >)**

Agilent Technologies > メンテナンスユーティリティを選択します。このユーティリティにアクセスするには Windows の管理者権限が必要です。

Windows ドメイン Windows ドメイン認証を使用して OpenLab ユーザーを識別する場合に、このユーティリティの**Windows ドメイン**タブが使用できます。

ユーザーの資格情報が保存されているサーバーに OpenLab CDS がアクセスできる必要があります。Windows ドメインサーバーにアクセスするために OpenLab CDS が使用する資格情報を、**Windows ドメイン**タブで指定または変更します。

クライアント/サーバーシステム：この機能でアクセスできるのは、**メンテナンスユーティリティ**プログラムを起動したコンピューターに保存された資格情報だけです。Windows ドメインサーバーへのアクセスに使用する Windows アカウントの**ドメイン**、**ユーザー名**、または**パスワード**を指定または変更するには、サーバー上にインストールされている**メンテナンスユーティリティ**プログラムを使用します。

サーバー設定 サーバー設定タブでは、異なるサーバー接続を管理できます。ワークステーションコンフィグレーションでは、通常はローカルマシンにのみ接続されています。

IaaS 設定 このタブの設定は、Workstation Plus には適用されません。

バックアップとリストアに関する重要な情報

OpenLab CDS Workstation Plus データベースをリストアするため前提条件は、OpenLab CDS Workstation Plus を定期的にバックアップすることです。Agilent では、このためにソフトウェアにより提供されるバックアップおよびリストアユーティリティを使用することをお勧めします。

バックアップユーティリティを使用して、即時バックアップまたは定期的なバックアップを実行します。バックアップユーティリティは、定期的なフルバックアップと、フルバックアップの間に実行する差分バックアップをサポートしています。

致命的なシステム障害が発生した場合、バックアップはデータ損失量を軽減します。バックアップを実施することで、バックアップ時点でコミットされたデータをリストアすることができるように保証されます。アップロード待ちでまだコミットされていないデータや、バックアップを実施した後にシステムに追加または更新されたデータは、バックアップをリストアしても復旧できません。

バックアップが正しく実施され、リストアできることを確認するには、リストア手順をテストする必要があります。有効なリストアを実行するには、障害復旧プランを作成する必要があります。[障害復旧プランの作成](#) 90ページ を参照してください。

注記

OpenLab CDS v3.0 に含まれるリストアユーティリティで復元可能なのは、OpenLab CDS v2.8 以降のバックアップファイルです。v2.7 以前のバージョンからのソフトウェアアップグレードはサポートしていません。2.7 環境で OpenLab CDS 2.7 のバックアップをリストアするには、OpenLab CDS v2.7 インストールメディアのバックアップおよびリストアユーティリティを使用してください。アップグレードについては、[OpenLab CDS バージョン 3.0 へのアップグレード](#) 113ページ を参照してください。

注記

バックアップとリストアのユーティリティは、ライセンス情報のバックアップおよびリストアには対応していません。ライセンス情報のリストアに関して詳しくは、Agilent ライセンスドキュメントを参照してください。

バックアップのコンテンツ

OpenLab CDS Workstation Plus は、ローカルファイルシステムにファイルおよびインデックスを保存します。フォルダーの場所は、製品のインストール時に決定します。フォルダー情報、監査証跡、署名などのその他のデータは、データベースに保存されます。

フルバックアップは、OpenLab CDS Workstation Plus からデータベース、構成ファイルおよびインストーラーファイルや、コンテンツ管理システムにアップロードされたすべてのファイルを含む、完全なデータセットを取り込みます。差分バックアップは、前回のフルバックアップ以降に発生した変更だけをバックアップします。差分バックアッププロセスは、フルバックアップよりも短時間で済みます。

フルバックアップは次のものが含まれます。

- コンフィグレーションファイル
- Shared Services、ローカルの Secure Storage、および Data Repository のデータベース
- コンテンツのストレージロケーション
- 証明書サーバー

必要な領域

バックアップ手順に必要な空き領域は、システムコンフィグレーション、バックアップロケーション、データベースのバックアップサイズなど、複数の要因によって異なります。空き容量は、オンプレミスに保存される容量の少なくとも 2 倍必要です。以前成功したバックアップが、何らかの理由で途中で終了したバックアップに上書きされるのを避けるためです。

コンフィグレーション

バックアップおよびリストアユーティリティでは、バックアップ/リストア中の一時的なバックアップロケーションとして特定のフォルダーを使用します。

[PostgreSQL データベースのカスタムデータディレクトリの設定 103 ページ](#) を参照してください。

差分バックアップを実行する場合、最初に OpenLab CDS および Data Repository PostgreSQL データベースを設定する必要があります。[PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート 101ページ](#) を参照してください。

バックアップログ

バックアップユーティリティは、バックアップオプションページに記載されたフォルダーにあるログを収集します（デフォルトでは、`%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Backup`）。バックアップ中にすべてのステップが確認され、失敗したステップで手順が停止します。失敗したステップのリンクから、現在のバックアップログファイルを開き、失敗の原因を特定します。バックアップが失敗した場合、バックアップロケーションの Temp フォルダーにバックアップの一部が保存されます。

障害復旧プランの作成

OpenLab CDS が、ハードウェアやソフトウェアの不具合により操作不能になるという予期せぬ事態に備えて、復旧プランを準備してください。このプランには、オペレーティングシステムを完全にリストアするためのすべての情報と手順を含める必要があります。ソフトウェアおよびデータのバックアップロケーションを物理的に異なるマシンに指定する必要があります。障害復旧プランが機能することを、あらかじめ確認しておいてください。

障害復旧プランには次の情報を含める必要があります。

- ハードウェア情報：CPU、メモリ、およびハードディスクのコンフィグレーション情報
- コンピューター ID：名前、IP、ドメイン、URL など
コンピューターの管理者情報：ユーザー名とパスワード
注記：ターゲットシステム上（バックアップのリストア先）のデータベースのすべてのユーザー名とパスワードがソースシステム上（バックアップ元）のものと同一である必要があります。[パスワードの変更ツール](#)を使用すると、リストア前にパスワードを同期できます。このツールを入手するには、Agilent のサポート担当にお問い合わせください。
- ソフトウェア情報：OS バージョン、パッチレベル

- インストールパラメータ：
 - OpenLab CDS インストールパス
注記：ターゲットシステム上のインストールパスは、ソースシステムと同じである必要があります。
 - インストールログファイル
 - ストレージロケーション
 - Shared Services データベース名
 - インストールライセンス
- サードパーティソフトウェア情報：アプリケーションとその更新、およびインストールパス
- バックアップ手順（[バックアップ手順](#) 92ページ を参照）。
- バックアップメディアのロケーションと構成の詳細
- リストア手順（[リストア手順](#) 104ページ を参照）。

バックアップ手順

手動バックアップの手順については、『Agilent OpenLab Server および OpenLab ECM XT 管理者ガイド (openlab-server-ecmxt-v2.8-administration-guide-ja.pdf, D0035354)』の指示に従ってください。

バックアップ中のウィルス対策スキャン

注意

バックアップ中にウィルス対策スキャンが行われると、バックアップが正常に完了できない場合があります。

- 1 定期的/スケジュール済みスキャンとリアルタイム保護の両方でバックアップロケーションが除外されていることを確認してください。
リアルタイム保護からバックアップロケーションを除外できない場合やリアルタイム保護をオフにできない場合、最終的なバックアップタスクが正常に完了しない可能性があります。
- 2 バックアップ中にウィルス対策スキャンが実行される場合、バックアップが正常に完了したか確認してください。
 - ・ バックアップが完了したら、バックアップロケーションにある「Current」（または「Current」および「Incremental」）のサブフォルダーを確認します。
 - ・ バックアップ時間に対応するログファイルに、「The backup has completed」と最後に記載されたエントリが含まれているか確認します。バックアップログは
%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Backup フォルダーに保存されます。
- 3 再試行ポリシーを変更します。
デフォルトでは、バックアップユーティリティツールは 10 秒間隔でバックアップが完了するよう 3 回試行します。
バックアップの完了設定を編集するには、<CDS_installation_directory>\Agilent Technologies\OpenLab Backup Utility フォルダーにある BackupUtility.config ファイルの
<Backup><BackupFinalizationSettings> セクションで、Delay および Retry

のプロパティを変更します。このファイルを更新できるのは、システム管理者権限を持つユーザーのみです。設定できる値は、Delay は 0 より大きい値、Retry は 1 より大きい値です。

新しい値はバックアップ中に適用されます。**即時バックアップ**の場合、処理中ページの最初のステップで適用され、**定期的なバックアップ**の場合、バックアップの開始時に適用されます。

暗号化

Windows におけるデータは、SMB（サーバーメッセージブロック）プロトコルを使用して、Windows ファイル共有に転送されます。このプロトコルはデフォルトでは暗号化されていません。このことは、ネットワーク共有にバックアップされたデータが、不正なアクセスにさらされる可能性があることを意味します。転送中のデータを保護するには、ソースおよびバックアップ先のシステムの両方において、SMB 暗号化を有効にすることを検討します。

SMB 暗号化の詳細については、Microsoft Learn の記事

「**SMB セキュリティ拡張機能**」を参照してください（<https://learn.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/file-server/smb-security>）。

バックアップユーティリティの使用

前提条件

- ・ 組み込み済みのローカル管理者以外の Windows アカウントを使用してバックアップユーティリティを実行する場合は、そのアカウントがローカルの管理者グループのメンバーである必要があります。ほとんどの環境では、ローカル管理者がユーザー権限をすでに受け継いでいるため、ユーザー権限を追加する必要はありません。

ただし、システム環境で、セキュリティポリシーにデフォルトの管理者権限が外されている場合、アカウントに以下の点も含まれていることを確認しなければならない場合があります。

バッチジョブとしてログオン

サービスとしてログオン

- ・ 以下の権限を持つ OpenLab CDS アカウントが必要です。

システム管理 > セキュリティの管理

システム管理 > システムコンポーネントの管理

アクティビティログのアクセス > アクティビティログの表示

機器管理 > 機器またはロケーションの表示

プロジェクト管理 > プロジェクトまたはプロジェクトグループの表示

- ・ 差分バックアップを使用するには、最初に設定する必要があります
([PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート](#) 101ページ を参照)。その設定に基づいたフルバックアップが必要です。

1 スタート > (すべてのアプリ >) Agilent Technologies >

バックアップユーティリティからバックアップユーティリティを開始します。ユーザーアカウント制御アクセスのリクエストが表示された場合、はいをクリックします。

ステータスページに、前回完了したバックアップの日付と時刻が表示されます。リンクをクリックするとバックアップロケーションが表示されます。

定期的なバックアップがスケジュールされている場合、現在のバックアップステータスと次回バックアップの開始日時が表示されます。

バックアップが現在実行中の場合、ステータスが**実行中**と表示されます。定期的にスケジュールされたバックアップが失敗した場合、ステータスに**失敗**と表示されます。

前回完了したバックアップに、前回成功したバックアップ（定期的なバックアップまたは即時バックアップタイプ）が実行された日時とそのロケーションが表示されます。バックアップに成功するとこの情報が表示されるようになります。

注記

タイムゾーンが変更された場合は、システムを再起動してください。再起動しないと、ステータスページの日時が一致しないことがあります。

2 必要に応じて、バックアップオプションページでバックアップオプションを選択します。

- **OpenLab バックアップタイプ**

自動バックアップ手順を設定するには、**定期的なバックアップ**を選択します。自動バックアップをスケジュールすることをお勧めします。

即時にバックアップを開始するには、**即時バックアップ**を選択します。定期的なバックアップへの影響はありません。

バックアップ設定の正確性チェックや 1 回のバックアップで必要なディスク領域と所用時間を確認するのに役立ちます。さらに、このオプションはリカバリ手順全体のテストの一部にすることができます。

- **バックアップログのパス**

フォルダーパスに、バックアップログファイル用のローカルファイルシステムを指定します（デフォルト：`%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Backup`）。マッピングドライブはサポートされていません。

以下のログファイルがあります。

BackupUI_log ファイル。ユーザーのインターフェイス上のアクティビティをすべて記録します。バックアップユーティリティの開始時に作成されます。

Backup_log ファイル。すべてのバックアップのアクティビティを記録します。バックアップを実行するたびに作成されます。

- **バックアップの圧縮**

データベースのバックアップのファイルサイズを可能な限り削減するには、**データベースのバックアップに最大圧縮を使用**を選択します。

注記：圧縮はデータベースのフルバックアップのみで行われます。差分バックアップ（PostgreSQL WAL ファイル）は圧縮されません。

WAL ファイル圧縮を設定するには、**PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート** 101ページ を参照してください。

- **スキップしたファイルバリデーション**

ファイルバリデーションには、プロジェクトのデータ量に応じて時間がかかる場合があります。バックアップおよびリストアのバリデーション中に、Shared Services レコードのみを確認する場合はスキップしたファイルバリデーションを選択してください。

3 設定ページで、バックアップの設定をします。

- 定期的なバックアップの場合、バックアップを有効にし、スケジュールを設定します。

定期的なバックアップを有効にすることを強くお勧めします。

定期的なバックアップを有効にするチェックボックスをオフにすると、スケジュールされたバックアップは実行されません。メンテナンス中などは、定期的なバックアップを無効にしてください。メンテナンスが完了したら、忘れずに定期的なバックアップを再度有効にしてください。

バックアップ中にシステムを利用するかどうか選択します（ホットバックアップの場合は**はい**、コールドバックアップの場合は**いいえ**）。

差分バックアップを有効にします。差分バックアップの時間と曜日を入力します。スケジュールの時間には 24 時間形式を使用します。

フルバックアップと差分バックアップを同じ曜日にスケジュールすると、フルバックアップが実行されます。

定期的なフルバックアップが失敗した場合、次の定期的なフルバックアップが成功するまでは、差分バックアップは失敗します。差分バックアップが失敗しないようにするには、定期的なバックアップに指定されたロケーションに即時バックアップを実行します。

- 即時バックアップの場合、バックアップ中にシステムを利用するかどうかを選択します。ホットバックアップの場合は**はい**、コールドバックアップの場合は**いいえ**を選択します。
 - ホットバックアップ：バックアップ中もシステムは稼働したままとなります。
 - コールドバックアップ：バックアップの前に、バックアップユーティリティが OpenLab CDS のすべてのプロセスを自動的に停止します。

4 バックアップロケーションページで、どこにバックアップを保存するかを選択します。

- バックアップパス**：ローカルまたはリモートのシステム上のバックアップロケーションへのパス。

ローカルシステムでのバックアップ先には、現在の Windows ユーザーがアクセス権を持っていないフォルダーを指定することも可能です。バックアップは常に Windows ビルドイン SYSTEM ユーザーが実行し、

成功したバックアップを保存できます。定期的なバックアップは実行されますが、現在の Windows ユーザーは適切な権限がなければ結果を表示できません。

リモートシステムの場合、UNC パスを指定します。

- ・ **ユーザーとパスワード**：リモートシステム上にバックアップを保存するには、ドメインユーザーのログイン詳細を入力します。このユーザーは、ローカルシステムの管理者権限、およびリモートシステムのバックアップパスに対する読み取り/書き込み権限を有している必要があります。

- 5 **Shared Services 資格情報** ページで、Shared Services 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。**検証**をクリックして資格情報が有効であることを確認します。

前のバックアップで使用された資格情報が読み込まれています。まだバックアップが実行されていない場合、デフォルトの管理者の資格情報が読み込まれます。

- 6 定期的なバックアップの場合：**通知** ページで、バックアップ通知を有効に設定できます。即時バックアップの場合、これはスキップされます。

- ・ **開始アドレス**を入力します。電子メールアドレスの設定方法については、コントロールパネルのオンラインヘルプを参照してください。
複数の送信先アドレスは、カンマで区切ります。各アドレスは長い形式（名前と電子メール）または短い形式（電子メールのみ）で表記できます。
- ・ **件名の接頭語**に、電子メール通知の件名の接頭語を指定します。
- ・ **テストメッセージの送信**を使用して、通知の設定が正しいことを確認します。

- 7 **レビュー** ページ：設定を確認します。**適用**をクリックするとバックアップが開始されるかバックアップスケジュールが保存されます。

- 8 **処理中** ページで進行状況を確認できます。

アドオン（Library Manager for OpenLab CDSなど）がインストールされていない場合、手順が**スキップ**と表示されることがあります。

- 9 バックアップ完了したら、**完了**をクリックします。

バックアップの結果

バックアップユーティリティを実行すると、指定したロケーションにバックアップフォルダーが作成されます。バックアップログが同じロケーションに作成されます。

PC > ローカルディスク (C:) > CDSBackup > Current >				
名前	更新日時	種類	サイズ	
CertificateService	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー		
CM	2023/12/21 18:50	ファイル フォルダー		
Installation	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー		
PostgreSQLDataDir	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー		
ReverseProxy	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー		
Verification	2023/12/21 18:22	ファイル フォルダー		
backup	2023/12/21 18:22	XML ドキュメント	5 KB	
Backup_log_12-21-2023(18_22_03.5011821)	2023/12/21 18:22	テキスト ドキュメント	34 KB	

注記

バックアップは時間がかかることがあります。バックアップが次回の定期的なバックアップまでに完了しない場合、次回の定期的なバックアップはスキップされます。最初のバックアップが完了すると、設定されたバックアップスケジュールが再開されます。

バックアップのステータスと所要時間に関する情報はバックアップログで入手できます。必要に応じてスケジュールを調整してください。

最後に実行したバックアップタスク中にバックアップが失敗した場合、バックアップロケーションの Temp フォルダーにバックアップの一部が保存される場合があります。

PC > ローカル ディスク (C:) > CDS_Backup >				
名前	更新日時	種類	サイズ	
Current	2022/05/05 10:43	ファイル フォルダー		
Temp	2022/05/05 10:45	ファイル フォルダー		

Temp フォルダーに backup.xml ファイルが含まれている場合はバックアップが成功したと見なされることがあります。この場合は、Temp フォルダー名を以下のように変更できます。

- フルバックアップを実行した場合、Temp フォルダー名を **Current** に変更します。
- 差分バックアップを実行した場合、Temp を **Incremental** に変更します。

バックアップが失敗した場合、バックアップログを確認します。たとえば、定期的なバックアップの実行前に Shared Services 資格情報が無効になったためにバックアップがスキップされる場合があります。その場合は、バックアップユーティリティから無効な資格情報を変更してください。

注記

アドレスやストレージタイプなどのストレージロケーションの設定を変更できます。また、ストレージロケーション間でデータを再配置できます。これらの手順の途中でフルバックアップや差分バックアップが実行された場合、システムは中間ステータスになり後で正しくリストアできなくなる可能性があります。

このため、ストレージロケーションの設定を変更した場合は、次のリストア手順を実行する前にフルバックアップを再度実行してください。さらに、差分バックアップをスケジュールを再設定してください。

バックアップバリデーション

バックアップバリデーションでは、バックアップの完了後にバックアップされたデータを検証します。バックアップ後に 2 種類のレポートが作成されます。どちらのレポートも Verification サブフォルダーに保存されます。

- VerificationReport.xml - ファイルやそれらのハッシュ、データベースのエンティティなど、バックアップされた技術情報が含まれます。リストアの場合、ファイルとデータベースのエンティティの比較にこのレポートが使用されます。
- VerificationReport.html - バックアップに関する情報、バリデーションされたファイルの数、不合格に関するファイル情報、およびデータベースエンティティのバリデーション結果が、人が読み取れるビューで表示されます。

バリデーションでは、メインエンティティ（ファイル、データベースエンティティ）が適切にバックアップされているか確認します。バリデーションするファイルの数は、バックアップコンフィグレーション後にコンフィグレーションファイルで指定します（デフォルトでは 10 %）。バックアップ実施後にファイルが検証され、レポートに含まれます。リストアの場合、レポートに含まれているすべてのエンティティが検証されます。バックアップ開始時間後に変更されたエンティティ（またはそのバージョン）はレポートに含まれず、リストア実施中にバリデーションされません。

ファイルのバリ デーション

ファイルのバリデーションは、以下のロジックが使用されます。

- バックアップユーティリティは、最初にバックアップされたすべてのファイルをカウントし、全ファイルの 10 % をランダムに使用します。バリデーションに使用されるファイルのパーセントは切り上げられます。たとえば、3 ファイルの 10% は 0.3 であるため、この値は 1 に切り上げられます。このようにして、このツールが 1 つ以上のファイルをバリデーションします。
- 次に、各ファイルのランダムなバージョンをユーティリティが取り出します。たとえば、1 つのファイルに 3 種類のリビジョンがある場合（1.0、2.0、3.0）、ユーティリティはランダムにリビジョンを選択し、取り出します。
- バリデーションでは、削除されたファイルを除外します。
- バリデーションは、バックアップされたファイルのチェックサムおよびサイズと、コンテンツ管理システムのファイル情報を比較します。チェックサムが等しい場合、バリデーションは合格です。そうでない場合、バリデーションは不合格です。

バリデーションするファイルの数は、<CDS_installation_directory>\Agilent Technologies\OpenLab Backup Utility フォルダにある BackupUtility.config ファイルで設定できます。このファイルを更新できるのは、システム管理者権限を持つユーザーのみです。Backup セクションで以下のプロパティを変更します。

- **PercentFilesVerification**：バリデーションするファイルの割合（デフォルトでは 10%）。設定できる値は 1 から 100 までです。負の値や小数の値、100 を超える値は設定できません。
- **TotalFilesVerificationLimit**：バリデーションするファイルの上限（デフォルトでは 10 000）。設定できる値は 0 より大きい値です。負の値や小数は設定できません。

新しい値はバックアップ中に適用されます。即時バックアップの場合、処理中ページの最初のステップで適用され、定期的なバックアップの場合、バックアップの開始時に適用されます。

Shared Services レコードのバリ デーション

Shared Services レコードのバリデーションでは、バックアップ時点のレコードの数を確認します。次のレコードがカウントされます。

- プロジェクト
- 機器
- ユーザー

アクティビティロ グレコードのバリ デーション

固定数のアクティビティログレコードをランダムに選択します。これらのレコードの情報がバックグラウンドで収集されます。リストア後、これらのアクティビティログレコードがバリデーションされます。

デフォルトでは、10,000 件のアクティビティログレコードが選択されます。この数は、<CDS_installation_directory>\Agilent Technologies\OpenLab Backup Utility フォルダにある BackupUtility.config ファイルで変更できます。最小値は 1、最大値は 10,000 です。

PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート

PostgreSQL は差分バックアップ戦略を備えています（継続的アーカイブ）。継続的アーカイブを有効にすると、PostgreSQL はデータベースのデータファイルに加えられたすべての変更を先行書き込みログ（WAL：Write Ahead Log）に記録します。ファイルシステムレベルのバックアップと WAL ファイルのバックアップを組み合わせるという戦略です。

継続的アーカイブを使用して正常に復旧させるには、少なくともバックアップの開始時間まで遡る連続的な一連のアーカイブされた WAL ファイルが必要です。このため、最初のベースバックアップの前に、以下のように WAL ファイルのアーカイブ手順を設定してテストしてください。

PostgreSQL の WAL ファイルのアーカイブ設定

差分コンフィグレーションツールは、OpenLab CDS Workstation Plus で使用するすべての PostgreSQL インスタンスの差分バックアップを自動的に設定できます。ツールによって以下のアクションが実行されます。

- OpenLab CDS PostgreSQL の差分バックアップの設定を更新。
 - 更新後に必要な PostgreSQL サービスの再起動。
 - バックアップユーティリティの BackupUtility.config ファイルを差分バックアップ有効に更新。
- 1 管理者としてコマンドプロンプトを実行します。
 - 2 ツールのインストールパスへ移動します。デフォルトでインストールした場合は、
C:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab Backup Utility\Incremental Config Tool です。
 - 3 以下のパラメータを使用して差分コンフィグレーションツールを実行します。

<code>-on or</code>	必須：差分バックアップを有効にしてデフォルトパスを設定するか、差分バックアップを無効にします。
<code>-off</code>	
<code>-pgwalDir <path></code>	オプション：OpenLab CDS PostgreSQL データベースの指定されたパスを設定します。パラメータが「on」の場合のみ。

例：

- 差分バックアップを有効にし、デフォルトパスを設定します：
`PgIncrementalConfigTool.exe -on`
- 差分バックアップを無効にします：`PgIncrementalConfigTool.exe -off`
- 差分バックアップを有効にし、指定されたパスを設定します：
`PgIncrementalConfigTool.exe -on -pgwalDir D:\wal\pg`

ツールが PostgreSQL データベースを設定し、PostgreSQL サービスを再起動します。正常に完了すると、**Configuration completed successfully** というメッセージが表示されます。エラーが発生した場合、

[PgIncrementalConfigTool has failed] というメッセージが表示されます。

ログファイル：<log file path>

PostgreSQL データベースのカスタムデータディレクトリの設定

- 1 現在の PostgreSQL サービス設定を取得するには、次のコマンドを実行します。 `sc qc postgresql-x64-17-dr`
-D オプションの後に現在のデータの保存場所が表示されます。
- 2 PostgreSQL の `postgresql-x64-17-dr` サービスを停止します。
- 3 現在のデータの保存場所にあるコンテンツを新しい保存場所へ移動します。
- 4 PostgreSQL サービス設定を変更して新しいデータ保存場所を設定するには、次のコマンドを実行します。例：

```
sc config postgresql-x64-17-dr binPath="\"C:\Program Files  
(x86)\PostgreSQL\17\bin\pg_ctl.exe\" runservice -N \"postgresqlx64-17-  
dr\" -D \"E:\NewDataLocation\" -w\"
```
- 5 PostgreSQL サービスのレジストリ値を更新します。以下のキーで新しいデータ保存場所を設定します。
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\PostgreSQL\021C31D3-C59B-4DED-BCBC-5EBFC034498C\Installations\postgresql-x64-17\DataDirectory
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\PostgreSQL\021C31D3-C59B-4DED-BCBC-5EBFC034498C\Services\postgresql-x64-17\DataDirectory
- 6 `postgresql-x64-17-dr` サービスを開始します。

リストア手順

リストアユーティリティによって、バックアップユーティリティで作成されたコールドバックアップとホットバックアップからシステムをリストアできます。ハードウェアやソフトウェアの不具合により操作不能になった場合、リストアユーティリティを使用して既存のバックアップから Workstation Plus をリストアします。

リストア手順は、成功したバックアップで取り込まれたコミット済みデータのみリストアします。バックアップの開始後に作成または更新されたデータは、そのバックアップからリストアしても復旧されません。AWS S3 ロケーションからの再構成やリストアは、Workstation Plus ではサポートされていません。

注記

OpenLab CDS v3.0 に含まれるリストアユーティリティで復元可能なのは、OpenLab CDS v2.8 以降のバックアップファイルです。v2.7 以前のバージョンからのソフトウェアアップグレードはサポートしていません。2.7 環境で OpenLab CDS 2.7 のバックアップをリストアするには、OpenLab CDS v2.7 インストールメディアのバックアップおよびリストアユーティリティを使用してください。アップグレードについては、[OpenLab CDS バージョン 3.0 へのアップグレード](#) 113ページ を参照してください。

注記

バックアップされたシステムの PostgreSQL の差分バックアップ設定でデフォルト以外のパスを使用している場合は、リストア後に[PostgreSQL データベースの差分バックアップサポート](#) 101ページ の指示に従ってください。

リストアログ

リストアユーティリティのログは、`%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Restore` フォルダーに保存されます。リストア中にすべてのステップが確認され、失敗したステップでリストア手順が停止します。失敗したステップのリンクから、現在のリストアログファイルが開き、失敗の原因を特定します。リストアコンフィギュレーション中に各ページでバリデーションされ、バックアップデータへのアクセス権の欠如、形式の誤りにより発生する可能性があるエラーが防止されます。

既存の OpenLab CDS システムのリストア

リストアユーティリティで、OpenLab CDS Workstation Plus がインストールされたシステムのリストアをします。以下の手順のように、バックアップユーティリティを使用してバックアップされたインストール済みシステムをリストアします。

注記

ターゲットの OpenLab CDS システムが、バックアップ元のシステムと同じ認証モード（例：ドメイン認証）を使用していることを確認してください。両方のシステムで、同じ Admin ユーザーをマッピングする必要があります。これにより、リストアが正常に実行されます。バックアップが異なる認証タイプのシステムで作成された場合、リストアは実行できません。

注記

ソースシステムとターゲットシステムで、ユーザーは同じパスワードを使用している必要があります。パスワードが異なる場合は、リストア前にパスワードの変更ツールを使用して同期させてください。このツールを入手するには、Agilent のサポート担当にお問い合わせください。

注記

OpenLab CDS は、バックアップが取られたシステムと同じ更新バージョンを有している必要があります。

前提条件

- 次の権限を持つ OpenLab CDS アカウントが必要です。
 - システム管理 > セキュリティの管理
 - システム管理 > システムコンポーネントの管理
 - アクティビティログのアクセス > アクティビティログの表示
 - 機器管理 > 機器またはロケーションの表示
 - プロジェクト管理 > プロジェクトまたはプロジェクトグループの表示
 - バックアップを含むフォルダーにアクセスできるように、このフォルダーの読み取り権限を持つユーザーがアプリケーションを起動してください。
- 1 リストアプロセスを実行する前に、OpenLab CDS Workstation Plus のすべての動作を停止してください。
 - 2 リストア中は、機器またはシステムのその他の部分がシステムを使用しないようにしてください。

- 3 開始 > (すべてのアプリ >) Agilent Technologies で、Restore Utility を右クリックし、管理者として実行します。Restore Utility は、ローカルの Windows 管理者としてログオンしている場合でも、必ず**管理者として実行**を使用して開始する必要があります。

- 4 リストアコンフィグレーションページで、バックアップロケーションとリストアモードを選択します。

バックアップがローカルまたは Windows 共有に配置されている場合、**ファイルシステム**をバックアップロケーションとして選択します。バックアップユーティリティで使用されたバックアップフォルダーを選択します。

適切なリストアモードを選択します。

- ・ バリデーションをスキップするには**リストアのみ**を選択します。
- ・ **リストアと一部のバリデーション**がデフォルトで選択されています。このオプションでは、アクティビティログインデックスを再構築するためにマニュアル手順を後で実行する必要があります。
- ・ アクティビティログインデックスを自動的に再構築するには、**リストアとフルバリデーション**を選択します。アクティビティログインデックスの再構築に要する時間は、アクティビティログレコードの数によって異なります。数時間かかることもあります。
- ・ すでにシステムをリストア済みの場合、**バリデーションのみ**を選択します。

次へをクリックします。

- 5 バリデーションを含むモードを選択し、システムのドメイン認証が有効の場合：**Shared Services 資格情報**ページで Shared Services 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。最後にバックアップしたときの資格情報があらかじめ読み込まれています。

検証をクリックして資格情報が有効であることを確認します。

- 6 レビューページで設定を確認し、**適用**をクリックします。

処理中ページでリストア手順の進行状況を確認できます。

アドオン（Library Manager for OpenLab CDSなど）がインストールされていない場合、手順が「スキップ」と表示されることがあります。

- 7 バリデーションステップが含まれる場合、バリデーションステータスの**完了**をクリックすると、バリデーションレポートが開きます。

- 8 リストア手順が完了したら、リストアユーティリティの**完了**をクリックします。

- 9 OpenLab CDS Workstation Plus システムをリストアし、再起動します。
システムをすぐに再起動するには、はいを選択します。再起動を後で手動で
実行する場合は、いいえを選択します。
- 10 リストアのみまたはリストアと一部のバリデーションを選択した場合：アク
ティビティログインデックスを再構築します（[アクティビティログインデッ
クスのマニュアル再構築](#) 107ページ を参照）。
- 11 既存の OpenLab CDS システムにリストアした後、システム全体をバック
アップします。これにより、BackupUtility.config ファイル内のすべての関
連設定が更新されます。[バックアップ手順](#) 92ページ を参照してください。

可能性のあるエラー

Agilent OpenLab Shared Services サービスは開始されていません。NET
HELPMMSG 3521 と入力すると、より詳しい説明が得られます。

考えられる原因	対策
Agilent OpenLab SharedServices サービスがす でに停止されています。	代わりに以下のコマンドを実行します。 del /s /f /q %ProgramData% ¥Agilent¥OLSS¥Index¥ActivityLog && net start SharedServicesHost

システムエラー 5 が発生しました。アクセスが拒否されました。

考えられる原因	対策
コマンドプロンプトに十分な権限がありませ ん。	コマンドプロンプトを管理者として実行して ください。

アクティビティログインデックスのマニュアル再構築

リストア後にアクティビティログを検索するには、インデックスが完全に再構
築されている必要があります。

バリデーションなしか、一部のバリデーションでシステムをリストアした場合、マニュアルで再構築を実行してください。アクティビティログレコードのリストアをバリデーションする前に、アクティビティログインデックスが再構築されている必要があります。

インデックスの再構築に要する時間は、アクティビティログレコードの数によって異なります。数時間かかることもあります。この処理中は、アプリケーションでアクティビティログの検索はできません。

アクティビティログを再構築するには：

- 1 管理者としてコマンドプロンプトを開始します。
- 2 ドライブ:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLab\Services\Activity Log Service に移動します。
- 3 ファイル Agilent.OpenLab.ActivityLog.Tools.Albit.exe を以下のパラメータで実行します。

<code>rebuild-index</code>	古いインデックスを削除する前に確認があります。その後で新しいインデックスが構築されます。
<code>--force</code>	オプション：確認の必要なし。
<code>--continue</code>	オプション：最初に古いインデックスを削除せずに、最後の実行が停止した場所から再構築を続行する。このオプションでは、タイムアウト後に全プロセスを再度開始する必要はありません。

リストアバリデーション

OpenLab ソフトウェアがインストール済みのシステムでのみバリデーションを利用できます。

バリデーションレポートは
%ProgramData%\Agilent\Restore\Verification に保存されます。

リストアユーティリティのログは、
%ProgramData%\Agilent\LogFiles\Restore に保存されます。

リストア中に各ページでバリデーションが実施され、コンテンツおよびアーカイブロケーションへのアクセス権の欠如、形式の誤りなど、発生する可能性があるエラーが防止されます。失敗したステップで停止します。失敗したステップのリンクから、現在のリストアログファイルが開き、失敗の原因を特定します。

Shared Services リストアバリデーションには以下のリストアアイテムのカウントが含まれます。
レコードのバリ

デーション

- プロジェクト
- 機器
- ユーザー

バリデーションは、バックアップされたアイテムの数と、リストアされたアイテムの数を比較します。リストアバリデーション数がバックアップバリデーションと異なる場合、リストアバリデーションが**失敗**と表示されます。

ファイルのバリ
デーション

コンテンツ管理システムに保存されているファイルのリストアがバリデーションの対象です。この手順は、バックアップ作成時に、**スキップしたファイルバリデーションオプション**を選択した場合にはスキップされます。

アクティビティロ
グレコードのバリ
デーション

アクティビティログレコードのバリデーションでは、バックアップ中にランダムに選択されたレコードが、リストア後のシステムで利用可能かどうかをバリデーションします。リストア後に不足しているレコードがある場合、アクティビティログレコードのバリデーションは失敗と見なされます。

ルーチンメンテナンス

ルーチンメンテナンスは定期的に行う必要があります。これらは Secure Storage データベース、Shared Services、および Data Repository データベースに関連しています。また、OpenLab サーバーによって提供されています。

以下のトピックに関する詳細は、『Agilent OpenLab Server および OpenLab ECM XT 管理者ガイド (openlab-server-ecmxt-v2.8-administration-guide-ja.pdf, D0035354)』を参照してください。

- リソース使用量のモニタ
- データベース統計の更新
- その他の最適な方法

トラブルシューティング

OpenLab CDS PC の動作が遅い

新しいデータ解析または測定クライアントを起動するには時間がかかります。多くの CDS インスタンスが PC で実行されます。

考えられる原因	対策
PC で利用可能なメモリが不足すると、Microsoft Windows はハードドライブへメモリのスワップアウトを開始します（メモリページング）。	• メモリの空き容量を増やすため、不要なアプリケーションを閉じてください。不要になった OpenLab クライアントを閉じ、同じマシンで実行するその他のアプリケーションを閉じることを検討してください。 • HDD（スピンドルドライブ）の代わりに SSD ハードドライブを使用することを検討してください。メモリスワッププロセスにより大幅に高速化されます。 • 問題が解決しない場合：メモリの追加を検討してください。
nslookup の応答時間がかなりすぎる。	DNS サーバーに逆引き参照ゾーンを設定してください。

ソフトウェアの最初のインスタンスを開くのが遅い

ソフトウェアアプリケーションの最初のインスタンスを開くのが、その後の使用時よりも遅くなります。この遅れは使用頻度の低いアプリケーションの場合にも見られる場合があります（例：Sample Scheduler から OpenLab Data Analysis を読み込むと、データ解析の動作が遅くなる場合があります）⁴。

4 一定時間操作を行わないとキャッシュが空になるため、時間が経過してから使用すると初めて使用するときと同様になる場合があります。

考えられる原因	対策
アプリケーション DLL の初回の読み込みは、以降、同じアプリケーションを使用するためにメモリがキャッシュされることから、初回のアプリケーションの読み込みには時間がかかります。メディアからの DLL の読み取りによって、初回の時間は異なります。以降、DLL の使用はメモリから読み取ります。このため、アプリケーションの初回（または頻度の低い）使用時の起動時間がその後の使用時と比較して異なる場合があります。²	• HDD（スピンドルドライブ）の代わりに SSD ハードドライブを使用することを検討してください。SSD からの読み取り時間は HDD より大幅に高速化され、多くの場合にこの初回のアプリケーション起動時間（DLL 読み取り）が解消します。

9

OpenLab CDS バージョン 3.0 への アップグレード

ライセンスアップグレード 114

Workstation Plus ソフトウェアのアップグレード 115

ウィザード完了後に必要なマニュアルステップ 118

アップグレード後のタスク 121

新規または更新された項目 122

ライセンスアップグレード

OpenLab CDS を購入すると、エンタイトルメント情報を含む電子メールが届きます。

電子ライセンスの認証 51 ページ の手順に従って、OpenLab CDS 電子ライセンスを有効にします。

注記

一緒にインストールされているその他の製品のライセンス（2D-LC ソフトウェア、GPC/SEC ソフトウェア、MS スペクトルデコンボリューションなど）は、変更する必要のない場合があります（SubscribeNet ライセンス）。これらを削除しないでください。この場合は、デュアルライセンスがサポートされます。

Workstation Plus ソフトウェアのアップグレード

現在のバージョンが OpenLab CDS リビジョン 3.0 に直接アップグレードできることを確認してください。直接アップグレードはリビジョン 2.6 以降からサポートされています。

OpenLab CDS v2.6 より古いバージョンは、直接アップグレードをサポートするバージョンへの中間ステップが必要です。Agilent では、これらのシステムを最初に v2.7 へアップグレードすることを推奨しています。

インストールされたすべてのアドオンおよび機器ドライバーの最新バージョンを取得してください。

システムドライブにアップグレードを完了するための十分なディスク領域があることを確認してください。十分なディスク領域がないと、キャッシュ中やその後のアップグレード中にインストーラが失敗する場合があります。50 GB のディスク空き領域が必要です。

ソフトウェアをアップグレードする前に、すべてのアップロードを停止し、ファイルアップロードキューを空にしてください。

アップグレードの前後に、システム全体をバックアップしてください。

注記

3.00OpenLab CDS v3.0 に含まれるリストアユーティリティでは、OpenLab CDS v2.8 以降からのバックアップファイルのみリストアできます。

- 1 ADFExport や 2D-LC などのアドオンソフトウェアをアンインストールしてください。Sample Scheduler for OpenLab をマニュアルでアンインストールしないでください。

注記

古いリビジョンのアドオンソフトウェアは、OpenLab CDS v3.0 ではサポートされていない場合があります。互換性のないアドオンを実行したり、アップグレード後にそれらをアンインストールしたりすると、データ解析アプリケーションが起動できなくなる可能性があります。

互換性については、各アドオンのマニュアルを確認してください。

- 2 Setup.exe ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。

- 3 プランタブから、**System Preparation Tool** を選択して、マシン上の Windows 設定を確認、および更新します。**System Preparation Tool の実行** 14 ページを参照してください。
- 4 インストールタブから、**OpenLab CDS Workstation Plus** を選択します。
- 5 アップグレード準備画面で、システムがバックアップ済みであることを確認します。次へをクリックします。
- 6 使用許諾契約書画面で、Agilent の使用許諾条件を読んで確認します。次へをクリックします。
- 7 サーバー情報画面で接続をクリックします。前のインストールでユーザー認証が要求された場合、管理者のコントロールパネルログイン資格情報を入力します。次へをクリックします。
- 8 コンポーネント資格情報：ソフトウェアコンポーネントで使用するパスワードを入力します。既存のパスワードが要件を満たしていない場合、新しいパスワードの入力を求められる場合があります。

パスワードは以下の一般的なガイドラインに従う必要があります。

- 最小 8 文字
- 大文字 1 文字以上
- 小文字 1 文字以上
- 数値 1 つ以上
- 使用可能な文字のみを含める

使用可能な全文字：

- 大文字 A-Z
- 小文字 a-z
- 数値 0-9
- 特殊文字：!@#\$%^&*_+=

注記

パスワードは必ず安全な場所に記録しておいてください。

次へをクリックして続行します。

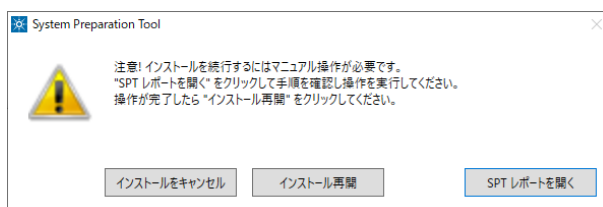
- 9 アップグレードウィザードは**システム準備画面**にシステムの推奨設定リストを表示します。システムに適用する必要のない項目のチェックボックスをオフにすることができます。必須設定はアップグレード時に自動的に適用され

ます。必須設定と推奨設定の概要は、『OpenLab CDS の要件とサポートする機器 (CDS_v3.0_Requirements_ja.pdf, D0028027ja)』の System Preparation Tool の章を参照してください。

次へをクリックしてレビューページへ進みます。設定はインストールの一環として適用されます。

- 10 レビュー画面で、アップグレードをクリックしてアップグレードを開始します。

- 11 オペレーティングシステムでユーザーアクションが必要な場合、以下の警告が表示されます。



続行するオプション

- ・ 推奨設定：SPT レポートを開くをクリックし、必要な操作セクションで更新が必要かどうかを確認します。操作が完了したら、インストール再開をクリックします。
- ・ インストールをキャンセル：インストールが中断されます。必要な更新を行ってインストールを再開します。
- ・ インストール再開：設定が適用されていない場合でも、ダイアログが閉じ CDS コンポーネントのインストールが続行されます。必要に応じて、インストールが完了した後に設定を更新できます。

- 12 アップグレードタブのすべてのコンポーネントがインストールされたら、次へをクリックします。

- 13 コンフィグレーション画面で次へをクリックします。

14 完了ページで、ソフトウェアベリフィケーションの起動をクリックします。

15 完了ページ：

- a 再起動チェックボックスをオンのままにします。
- b v2.6 または v2.7 からアップグレードした場合：アップグレードを完了するために、再起動後に OpenLab Database Import/Transfer Service ツールが実行されることを確認します。
- c 完了をクリックします。

ウィザード完了後に必要なマニュアルステップ

データの転送

注記

この手順は、v2.6 または v2.7 からアップグレードした場合のみ必要です。
v2.8 からのアップグレードには不要です。

- 1 v2.6 または v2.7 のデータを v3.0 へ転送します。

データを転送できるように、OpenLab CDS v3.0 へのアップグレード時に OpenLab Database Import/Transfer Service ツールが自動的にインストールされます。

標準的な Workstation Plus の場合、転送には 60 ～ 90 分かかると予想されます。

- a 再起動後に、スタートメニューの OpenLab Database Import/Transfer Service ツールに移動します。ツールを右クリックし、**管理者として実行**を選択します。ツールにより、必要なヘルスチェックがすべて自動的に実行されます。
- b チェックが成功したら、**開始**をクリックします。
- c データの転送が完了したら、**レポートの表示**をクリックして確認レポートを表示します。
- d **確認**をクリックして、転送に完了のマークを付けます。**確認**をクリックしないと、Windows の再起動時に OpenLab Database Import/Transfer Service ツールが表示され続けます。

アドオンとドライバーの更新

- 1 互換性のあるリビジョンのアドオンをインストールします。
- 2 機器ドライバーを最新バージョンにアップグレードします。LC/MS または GC/MS ドライバーをアップデート済みの場合、機器のファームウェアが最新リビジョンにアップデートされていることを確認してください。
ドライバーのアップグレードの詳細については、**アドオンドライバーソフトウェアのインストールまたはアップグレード 32ページ** を参照してください。
- 3 権限または署名レベルの調整が必要かどうか確認します（**新規または更新された項目 122ページ** を参照）。
- 4 アップグレードを完了する前に、システム全体をバックアップしてください。**バックアップ手順 92ページ** を参照してください。

注記

v2.6 または v2.7 システムをアップグレードした場合：アップグレード前のバックアップは、アップグレード後のシステムと互換性がないため、使用できなくなります。

解析メソッドの更新を検討

古い CDS バージョンからメソッドとデータを OpenLab CDS 3.0 に移行した後で、更新が必要な場合があります。

- ・ 動的な EIC/SIM RT シグナル抽出により、面積カウントや高さが変化する場合があります。ピークのベースラインがわずかに変化するため、積分結果が従来と異なる可能性があります。

OpenLab CDS バージョン 3.0 へのアップグレード

Workstation Plus ソフトウェアのアップグレード

- ・ クオリファイア比の参照シグナルが設定可能になったため、Agilent では、OpenLab CDS v2.6 以前を使用して作成されたメソッドに対しては、クオリファイア比の更新を推奨します。

詳細は、『[OpenLab Help and Learning](#)』の以前のバージョンからのデータを使用を参照してください。

アップグレード後のタスク

バージョン 2.6 または 2.7 から バージョン 3.0 へのアップグレードでは、OpenLab CDS の PostgreSQL データベースインスタンスを置き換えます。前のデータベースを無効にするには、次の手順に従ってください。

- レガシーサービス **olcm-postgresql-x64-11** (v2.5 または v2.6) 、**olcm-postgresql-x64-14** (v2.7) 、または **olcm-postgresql-x64-15** (v2.8) を停止し、無効にします。PostgreSQL 17.x サービスは停止しないでください。
バリデーション：Web ブラウザを開き、
<https://localhost/openlab-storage/> と入力します。
レガシーサービスを無効にしても、Content Browser ログインページがエラーメッセージなく開く場合、更新後のコンテンツ管理システムには影響しません。

次のステップはオプションです。ディスク空き領域を増やすことができます。データ損失を防ぐため、慎重に説明に従ってください。

- 設定 > アプリと機能へ移動し、レガシー PostgreSQL データベースの PostgreSQL - OLCM をアンインストールします。
バリデーション：Web ブラウザを開き、
<https://localhost/openlab-storage/> と入力します。レガシー PostgreSQL データベースをアンインストールしても、Content Browser ログインページがエラーメッセージなく開く場合、更新後のコンテンツ管理システムには影響しません。
- エクスプローラーを開き、レガシーデータベースフォルダー
%ProgramData%\Agilent\PostgreSqlData-11-OLCDS (v2.5 または v2.6) 、
%ProgramData%\Agilent\PostgreSqlData-14-OLCDS (v2.7) 、または
%ProgramData%\Agilent\OpenLab Platform\PostgreSQL\15 (v2.8) を削除します。
PostgreSQL 17.x サービスの実行中は、使用中のデータベースフォルダーが誤って削除されないようになっています。
- CDS v2.8 より前のバージョンの場合には、ドライブ:\DSdata\DSIndex フォルダーのコンテンツを削除します。ドライブ:\DSdata\ フォルダーの他のコンテンツは、変更したり削除しないでください！
- エクスプローラから、
%ProgramData%\Agilent\OLSS 内のインデックスフォルダーを削除します。
古いアクティビティログインデックスが含まれています。

新規または更新された項目

ライセンス

OpenLab CDS 3.0 では、SubscribeNet ライセンスに加えて、電子ライセンスをサポートしています。電子ライセンスにより **OpenLab CDS システム**ライセンスが提供されます。これはクライアント/サーバーの任意数の AIC をカバーするものです。

AIC ライセンスでは、**OpenLab CDS システム**ライセンスを使用して、コア機能を v3.0 へアップグレードする必要があります。

権限およびロール

以前のバージョンからアップグレードすると、新しい権限およびロールが作成される場合があります（ロールと権限の詳細については「付録」を参照）。

例：

- OpenLab CDS 3.0 では、各権限が再編成されています。カテゴリ数を減らし、カテゴリ名に機能を含めています。
たとえば、**生データのインポート**権限の以前のカテゴリは**データ**から、**OpenLab CDS: データ解析**に移っています。この再編成による、ロールへの権限割り当てに影響はありません。
- 以前のバージョンでは、生データのインポートは**化学者**ロールの**データのインポート**権限に含まれていました。Shared Services バージョン 3.7 / OpenLab CDS 2.8 から、**生データのインポート**権限が追加されています。この権限は、たとえば ChemStation または EZChrom の生データをインポートするときに必要です。
この新しい権限はどのロールにも自動的に追加されません。**化学者**ロールに生データのインポートを引き続き許可する場合、新しい権限をマニュアルで追加してください。
- Shared Services バージョン 3.6 / OpenLab CDS 2.7 から、**アクティビティログの表示**権限が追加されています。この権限はアクティビティログおよび監査証跡を表示するために必要です。この権限は、新しいロール**アクティビティログのアクセス**にデフォルトで割り当てられています。アップグレード時に、この新しいロールは既存のすべてのユーザーおよびグループに自動的に割り当てられます。

アクティビティログの表示権限は、デフォルトのロールシステム管理者にも自動的に追加されています。

署名レベル

OpenLab CDS 2.8 から、電子署名の署名レベルに結果セットの作成者を含めたり除外したりできます。署名ステップへ作成者を追加する詳細については、OpenLab Help and Learning を参照してください。

OpenLab CDS のアンインストール

- 1 管理者としてログインします。
- 2 Windows の設定で、**アプリ > アプリと機能**を開きます。
- 3 インストールした OpenLab CDS アドオンは個別にアンインストールします（ADExport for OpenLab など）。
- 4 **Agilent OpenLab CDS** を選択し、アンインストールを許可します。
OpenLab CDS アンインストールウィザードが開きます⁵。ウィザードのアンインストールをクリックし、ウィザードに従います。
- 5 Windows の設定の**アプリ > アプリと機能**から、以下のコンポーネントを削除してアンインストールを続行します。
 - **Agilent Software Verification Tool**
 - **PostgreSQL - OLCM**
PostgreSQL をアンインストールすると、データディレクトリは削除されていないという警告が表示されます。削除する場合は、インストール時に定義したフォルダー（C:¥DSData など）を手動で削除します。
 - **機器ドライバー**
OpenLab CDS の OpenLab インストーラーでインストールされたドライバーは、自動的にアンインストールされます。その他のドライバーをインストールした場合、手動でアンインストールします。
- 6 再起動します。

⁵ アンインストールウィザードは、ソフトウェアをインストールするインストールウィザードから開始することもできます。

トラブルシューティングのヒント

必要なディスク領域

OpenLab CDS アプリケーションをリビジョン 3.0 へアップグレードする場合、インストールされているすべてのパッケージが
ドライブ:\ProgramData\Package Cache にコピーされるため、システムドライブに 10 GB 以上のディスク領域が必要となります。USB のコンテンツをコンピューターにコピーする場合、追加で 10 GB のディスク領域が必要となります。

コントロールパネルの権限 127

プロジェクト権限 128

機器権限 135

管理者権限 135

営業およびサポートのお問い合わせ先 137

コントロールパネルの権限

次に説明されている権限は、コントロールパネルの各種ロールと関連付けることができます。次のロールが使用できます。

- すべて
- アクティビティログのアクセス
- バルクインポートユーザー
- 化学者
- ファイルストレージロケーション管理者
- 機器管理者
- 機器ユーザー
- ロックスケジュール管理者
- プロジェクト管理者
- プロジェクトコンテンツの削除
- Secure Storage 管理者
- Secure Storage 承認者
- Secure Storage アーキビスト
- Secure Storage 投稿者
- Secure Storage コンテンツ削除
- Secure Storage 閲覧者
- ストレージコンフィグレーション管理者
- ストレージロケーション管理者
- システム管理者
- 技術者
- Storage Administration コンテンツの表示

コントロールパネルの **管理 > ロール** で、関連付けられた権限を表示または変更したり、自身のロールを作成したりできます。

プロジェクト権限

表 6: OpenLab CDS: サンプルリクエスト

名前	説明	依存関係
自分の保留中のランをキャンセル	ランキューにある自分の保留中のランをキャンセルする。	
シーケンスの作成と編集	シーケンス (*.sqx) を作成、編集または保存する	プロジェクトコンテンツの編集
メソッドをオーバーライドするパラメータの編集	定義済みの測定メソッドのパラメータをオーバーライドする。	プロジェクトコンテンツの編集 測定メソッドの作成と編集
測定中のシーケンスを編集	自分で実行しているシーケンス（ランキューのステータスが測定中）を編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
優先サンプルの分析	優先シングルサンプルをキューに追加する。	プロジェクトコンテンツの編集 シングルサンプルの実行
シングルサンプルの実行	通常のシングルサンプルをキューに追加する。	プロジェクトコンテンツの編集
一般ステータスの測定メソッドの使用	ステータスが一般の測定メソッドを使用する。	プロジェクトコンテンツの編集 シーケンスの作成と編集 シングルサンプルの実行
一般ステータスの解析メソッドの使用	ステータスが一般の解析メソッドを使用する。	プロジェクトコンテンツの編集
一般ステータスのサンプルプレップメソッドの使用	ステータスが一般のサンプルプレップメソッドを使用する。	機器またはロケーションの表示 機器の実行 プロジェクトコンテンツの編集 シーケンスの作成と編集 シングルサンプルの実行

表 7: OpenLab CDS：管理

名前	説明	依存関係
カスタムツールセクションの表示	アプリケーションに追加された外部プログラムをカスタマイズツールから開始する。	
監査証跡エントリの追加	マニュアルでエントリを追加し、自身のアクションを監査証跡に記録する。	プロジェクトコンテンツの編集 結果セットメソッドの保存 マスターメソッドの保存
メソッド監査証跡設定の変更	メソッドの監査証跡設定を編集および保存する（コントロールパネルのプロジェクトプロパティ）。	プロジェクトまたはプロジェクトグループの管理 プロジェクトコンテンツの編集

名前	説明	依存関係
メソッドステータスの変更	サンプルプレップメソッド、測定メソッド、および解析メソッドのステータス（一般、承認済、廃止済）を変更する。	プロジェクトコンテンツの編集 サンプルプレップの作成と編集 測定メソッドの作成と編集 マスターメソッドの保存
監査証跡のレビュー	変更された監査証跡をレビューしたことを確認する。	プロジェクトコンテンツの編集 結果セットメソッドの保存 マスターメソッドの保存

表 8: OpenLab CDS: データ解析

名前	説明	依存関係
新規結果セットの作成	さまざまなソースのシングルサンプルまたはシーケンスを組み合わせて、新たな結果セットに統合する。	プロジェクトコンテンツの編集
キャリブレーションポイントの有効/無効	検量線の個々のポイントを無効または有効にする。	プロジェクトコンテンツの編集
クロマトグラムのマニュアル抽出	MS（EIC または SIM）クロマトグラムをデータからマニュアルで抽出する。	プロジェクトコンテンツの編集
マニュアル化合物同定	ピークに化合物をマニュアルで割り当てる。	プロジェクトコンテンツの編集
マニュアル積分	クロマトグラムウィンドウでマニュアル積分を有効にする。	プロジェクトコンテンツの編集
MS ライブラリの手動検索	マニュアルで MS ライブラリ検索を行う。	プロジェクトコンテンツの編集
MS スペクトルデコンボリューションの手動操作	MS スペクトルデコンボリューションをマニュアルで実行し、MS スペクトルデコンボリューション結果を削除する。	プロジェクトコンテンツの編集
スペクトルのマニュアル抽出	UV または MS スペクトルをデータからマニュアルで抽出する。また、抽出されたスペクトルを削除する。	プロジェクトコンテンツの編集
サンプル情報の編集	注入りリストウィンドウの情報を編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
データのエクスポート	OpenLAB アーカイブ (*.olax) ヘデータをエクスポートする。	プロジェクトコンテンツの編集
データのインポート	OpenLab アーカイブ (*.olax) のデータを OpenLab システムへインポートする。	プロジェクトコンテンツの編集
生データのインポート	生データのインポート（例: ChemStation または EZChrom から、AIA データフォーマット、GC/MSD MassHunter、または MSD ChemStation）。	プロジェクトコンテンツの編集
Custom Calculation Editor の起動	Custom Calculation Editor をデータ解析から起動する。	プロジェクトコンテンツの編集

名前	説明	依存関係
結果のロック	結果セットをロックして変更できないようにする。	プロジェクトコンテンツの編集
結果レポートの印刷	メソッドまたは結果レポートを作成する。	プロジェクトコンテンツの編集
データの再解析	データまたは結果セットを再解析する。	プロジェクトコンテンツの編集
レポートの保存	レポートをディスクまたはネットワーク共有上のロケーションに保存またはエクスポートする。	プロジェクトコンテンツの編集

表 9: 電子署名

名前	説明	依存関係
データファイルの電子署名	データファイルに署名する	プロジェクトコンテンツの編集 結果セットメソッドの保存
電子署名の取り消し	電子署名を取り消す。	プロジェクトコンテンツの編集 結果セットメソッドの保存

表 10: OpenLab CDS：メソッド開発

名前	説明	依存関係
測定メソッドの作成と編集	測定メソッドファイル (*.amx) を作成、編集または保存する	機器またはロケーションの表示 機器の実行 プロジェクトコンテンツの編集
サンプルプレップの作成と編集	オートサンブラのサンプルプレップメソッド (*.smx) を表示、編集、または保存する	機器またはロケーションの表示 機器の実行 プロジェクトコンテンツの編集
シーケンステンプレートの作成と編集	シーケンステンプレート (*.stx) を作成、編集または保存する。	機器またはロケーションの表示 機器の実行 プロジェクトコンテンツの編集
タスクの作成と編集	タスクファイル (*.tmx) を作成、編集または保存する。	機器またはロケーションの表示 機器の実行 プロジェクトコンテンツの編集
解析メソッドの作成	新規解析メソッド (*.pmx) を作成、またはメソッドを新しい名前で作成する。	プロジェクトコンテンツの編集
レポートテンプレートの作成	レポートビューでレポートテンプレート (*.rdl) を作成または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
メソッドの削除	データ解析のデータ選択ビューで、解析メソッド (*.pmx) または測定メソッド (*.amx) を削除する（プロジェクト管理 > プロジェクトのコンテンツの削除権限も必要）。	プロジェクトコンテンツの編集 プロジェクトコンテンツの削除

名前	説明	依存関係
レポートテンプレートの削除	データ解析のデータ選択ビューで、レポートテンプレート (*.rdl) を削除する (プロジェクト管理> プロジェクトのコンテンツの削除権限も必要)。	プロジェクトコンテンツの編集 プロジェクトコンテンツの削除
シーケステンプレートの削除	データ解析のデータ選択ビューで、シーケステンプレート (*.stx) を削除する (プロジェクト管理> プロジェクトのコンテンツの削除権限も必要)。	プロジェクトコンテンツの編集 プロジェクトコンテンツの削除
キャリブレーションパラメータの編集	メソッドの化合物>キャリブレーションセクションのパラメータを表示および編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
クロマトグラム抽出パラメータの編集	メソッドの抽出>クロマトグラムセクションのパラメータを表示または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
カスタム計算パラメータの編集	メソッドのツール>カスタム計算セクションのパラメータを表示または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
一般パラメータの編集	メソッドの全般>プロパティセクションのパラメータを表示および編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
同定パラメータの編集	メソッドの化合物>同定セクションのパラメータを表示または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
積分パラメータの編集	メソッドの積分イベントセクションのパラメータを表示または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
MS ライブラリパラメータの編集	メソッドのスペクトル解析 > MS ライブラリ検索セクションのパラメータを表示および編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
MS スペクトルデコンボリューションパラメータの編集	メソッドのスペクトル解析 > MS スペクトルデコンボリューションセクションのパラメータを表示および編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
ポスト解析用プラグインパラメータの編集	メソッドのポスト解析用プラグインセクションのパラメータを表示および編集する	プロジェクトコンテンツの編集
レポートパラメータの編集	メソッドのレポート>注入レポートセクションのパラメータを表示および編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
サンプル純度パラメータの編集	メソッドの MS サンプル純度セクションのパラメータを表示または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
シグナルパラメータの編集	メソッドの全般>シグナルセクションのパラメータを表示または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
スペクトルパラメータの編集	メソッドの化合物>スペクトルセクションのパラメータを表示または編集する	プロジェクトコンテンツの編集
スペクトル抽出パラメータの編集	メソッドの抽出>スペクトルセクションのパラメータを表示または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集

名前	説明	依存関係
システムスータビリティパラメータの編集	メソッドのシステムスータビリティセクションのパラメータを表示または編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
積分の最適化：ピーク結果の表示	積分された各ピークのリテンションタイム、面積、および面積 % を積分の最適化に表示する。	プロジェクトコンテンツの編集
古いマスターメソッドの読み込み	コンテンツ管理付きの場合のみ：古いバージョンのマスターメソッドを読み込む。	プロジェクトコンテンツの編集
マスターメソッドの保存	解析メソッドへの変更をメソッドフォルダーに保存する。	プロジェクトコンテンツの編集
結果セットメソッドの保存	解析メソッドへの変更を結果セットフォルダーに保存する。	プロジェクトコンテンツの編集
レポートテンプレートアイテムをロック/ロック解除	レポートテンプレートアイテム（テーブル、クロマトグラム、アイテムのグループなど）のロックまたはロック解除を許可して、各アイテムをユーザーが変更できるようにする。	プロジェクトコンテンツの編集
積分の最適化の使用	積分最適化のパラメータを編集し、ウィザードを実行し、ウィザードの機能を使用する。	プロジェクトコンテンツの編集 結果セットメソッドの保存
レポートテンプレートの検証	OpenLAB CDS 以外で変更されたレポートテンプレートの使用を確認する	プロジェクトコンテンツの編集

表 11: プロジェクト管理

名前	説明	依存関係
プロジェクトコンテンツの削除	データ解析のデータ選択ビューで、テンプレートおよびメソッドを削除する。	プロジェクトコンテンツの編集 レポートテンプレートの削除 シーケンステンプレートの削除 メソッドの削除
プロジェクト関連ファイルの管理	OpenLab CDS アドオンが必要となる場合があります。アドオンドキュメントを参照してください。	
プロジェクトコンテンツの編集	新しいバージョンのファイル（データ、メソッド、またはテンプレートなど）を作成する。メソッドまたはテンプレートを削除する。	
プロジェクトまたはプロジェクトグループの管理	プロジェクトおよびプロジェクトグループを作成、移動、編集、または削除やプロジェクトプロパティを編集する。プロジェクトまたはプロジェクトグループの権限の編集はできません。	

名前	説明	依存関係
プロジェクトまたはプロジェクトグループのアクセスの管理	プロジェクトアクセス設定を表示または編集する。	
プロジェクトまたはプロジェクトグループの表示	プロジェクトとプロジェクト詳細を閲覧する。 編集はできません。 注記：この権限はすべてのユーザーに必要です。	

表 12: Secure Storage (Content Browser の権限)

名前	説明	依存関係
チェックイン/チェックアウト	ファイルのチェックアウト、チェックイン、および自分でチェックアウトしたファイルのチェックアウトを取り消す。	コンテンツの表示
ファイル/フォルダーのコピー	ファイルおよびフォルダーを Secure Storage 内の別の場所へコピーする。	コンテンツの表示
フォルダーの作成/名前変更	フォルダーを作成またはフォルダー名を変更する。	コンテンツの表示
ファイル/フォルダーの削除	ファイルおよびフォルダーを Secure Storage から削除する。	コンテンツの表示
ファイル/フォルダーのダウンロード	- ファイルおよびフォルダーのダウンロード - ZIP 形式でダウンロード - ファイルのプレビュー - ファイル/フォルダーリンクの作成 - ファイル/フォルダーリンクの使用	コンテンツの表示
ファイルの電子署名	データファイルに電子署名を適用する。	コンテンツの表示
ファイル/フォルダーのロック	ファイルおよびフォルダーが変更、移動、または削除できないようにロックする。	コンテンツの表示
ファイル/フォルダーの移動	ファイルおよびフォルダーを Secure Storage 内の別の場所へ移動する。	コンテンツの表示
他のユーザーによるチェックアウトの取り消し	他のユーザーがチェックアウトしたファイルのチェックアウトを取り消す。	コンテンツの表示
ファイル/フォルダーのロック解除	ファイル/フォルダーのロックを解除する。	コンテンツの表示
ファイル/フォルダーのアップロード	ファイルおよびフォルダーを Secure Storage へアップロードする。	コンテンツの表示

名前	説明	依存関係
コンテンツの表示	コア機能へアクセスする。 - ログイン - コンテンツの参照 - ファイルのプロパティの表示 - フォルダーのプロパティの表示 - クイック検索	
Storage Administration コンテンツの表示	ストレージコンテンツを閲覧する。	コンテンツの表示

表 13: OpenLab CDS: 機器操作

名前	説明	依存関係
測定中のサンプルを中断	キューに追加されたすべての測定中シーケンスまたはシングルランを中断する。	
すべての保留中のランをキャンセル	他のユーザーが追加したものを含む、ランキュー内の保留中のランをキャンセルする。	
測定中のすべてのシーケンスを編集	任意のユーザーが実行しているシーケンス（ランキューのステータスが測定中）を編集する。	プロジェクトコンテンツの編集
アドホックモード有効	機器に対してアドホックモードを有効および無効にする。	
マニュアルコントロール（分析中）	機器の分析中、マニュアルコントロール機能にアクセスする。	
マニュアルコントロール（機器待機時のみ）	機器が待機中の間、マニュアルコントロール機能にアクセスする。	
CDS クライアントで機器コンフィグレーションを変更	実行中の測定クライアントから直接機器コンフィグレーションを変更する。 注記：この権限は、一部の機器ドライバー上でまだ使用できません。	
MS オートチューニング	MS オートチューニングを実行し、チューニングをチェックする。	
MS オートチューニングとマニュアルチューニング	マニュアルチューニング、オートチューニング、およびチェックチューンを含む、すべてのMS チューニングとメンテナンス機能にアクセスする。	
アドホックモードのオーバーライド	他のユーザーが有効にしたアドホックモードを無効にする。	
保留中のランの順番を並べ替え	ランキューにある保留中の分析のキューアイテムの順番を並べ替える。ランキュー内でアイテムを移動。	

名前	説明	依存関係
アクセス要求	別のユーザーによって現在ロックされているシーケンス、ランキュー、または機器へのアクセスをリクエストする。	
スナップショット結果のレビュー	測定中のサンプルをデータ解析で開く。	機器またはロケーションの表示 機器の実行 プロジェクトまたはプロジェクトグループの表示

機器権限

表 14: 機器管理

名前	説明
機器またはロケーションの表示	ツリー内のロケーションを表示、アクセスし、ロケーションのプロパティを表示する。アクセスセキュリティの編集はできない。
機器またはロケーションの管理	ロケーションを作成または移動する。プロパティを編集する（名前、説明など）。
機器またはロケーションアクセスの管理	ロケーションアクセス設定を表示または編集する。
機器の実行	ユーザーは機器セッションを開始できる。
機器サービス	機器をロックまたはロック解除する。

管理者権限

表 15: Secure Storage（Storage Administration の権限）

名前	説明
ファイル/フォルダーのインポート	ファイルおよびフォルダーをバルクインポートする。
ファイルストレージの管理	ファイルにアクセスし、ストレージロケーション間でファイルを移動させる（ファイルの再配置）。

名前	説明
ストレージロケーションの管理	ストレージロケーションにアクセスし、追加/編集する。
ファイルロックのスケジュール	ファイルのロックスケジュールにアクセスし、管理する。

表 16: アクティビティログのアクセス

名前	説明
アクティビティログの表示	システムアクティビティログにアクセスする（ログエントリの記録は影響されません）。

表 17: システム管理

名前	説明
プリンタの管理	プリンタおよび印刷サーバーを追加/削除できる。
管理レポートの作成	システム管理レポートを作成できる。
アクティビティログのプロパティの編集	コントロールパネルでアクティビティログ設定の変更をする。
システムコンポーネントの管理	コントロールパネルでライセンスおよび機器オプションの変更をする。 アドオンソフトウェアの登録。
セキュリティの管理	セキュリティ設定の変更とセキュリティロールの割り当て。 ユーザー、グループ、およびロールの追加、変更、または削除。 注記：この権限が割り当てられたユーザーは、 Shared Services のすべての設定へのアクセス権を自分自身に与えることが可能です。 慎重に使用してください。
機器コントローラの管理	コントロールパネルで機器コントローラを表示し、管理できる。
ロックされた UI をロック解除	他のユーザーがロックしたセッションにログインできる。

営業およびサポートのお問い合わせ先

お問い合わせ先

ソフトウェアテクニカルサポートの連絡先：

<https://www.chem-agilent.com/contents.php?id=1004254>

アジレントコミュニティ

1 万人以上のユーザーが参加するアジレントコミュニティで、疑問が解消されるかもしれません。プラットフォーム技術によって構成された、厳選されたサポート資料をご覧ください。同業者や協力者に質問することができます。作業に関連した新しいビデオやドキュメント、ツール、ウェビナーで通知を受けられます。

<https://community.agilent.com/>

本書の内容

このドキュメントには、OpenLab CDS Workstation Plus（Secure Storage 付き）のインストール手順、コンフィグレーション、管理、およびメンテナンスの方法が記載されています。ライセンス管理とオペレーティングシステムの設定に関する情報も記載しています。

マニュアルでは、以下について説明します。

- OpenLab CDS Workstation Plus のインストール
- ソフトウェアのアクティブ化
- OpenLab CDS Workstation Plus のコンフィグレーション
- オプションの手順
- カスタマイズ
- OpenLab CDS ソフトウェアについて
- システム設定およびメンテナンス

www.agilent.com

© Agilent Technologies Inc. 2015-2026
エディション：2026 年 5 月

文書番号：D0141674ja Rev. A.00

